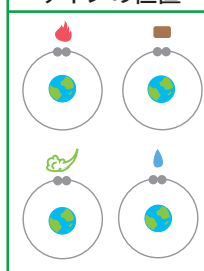


7 アспект

こう
合



サインの位置



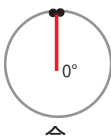
合は天体の二人ば織り。背後で上位の天体が
気づかぬ間に力を振るう。

合はどちらの天体も同じサインにあるため 120°と同じく 調和的です。
背後の上位天体は自分と同化しているためストレスは感じにくいのですが…。

「外から見た他の人」が違和感を覚えることも。例えば「子どもは子どもらしくあれ」と
思っている大人が、天王星と月が合の子どもに「反抗的だ」などと感じるケースです。

「外から見た他の人」は、ここでも「使えていない天体」と、とらえましょう。

合がもたらす「内面のゆれ」を十分に理解し、他の天体を使いこなすことで、成長は
加速します。「内面のゆれ」を個性にまで高めて、魅力の一つにしていきましょう。

 合	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	6. [] が、[] に、背後で知らぬ間に影響する。	



ぼくは月と天王星が合。

「6. □□が □□に 背後で知らぬ間に影響する。

天王星の個人主義 が、月の感情 に、背後で知らぬ

間に影響する。

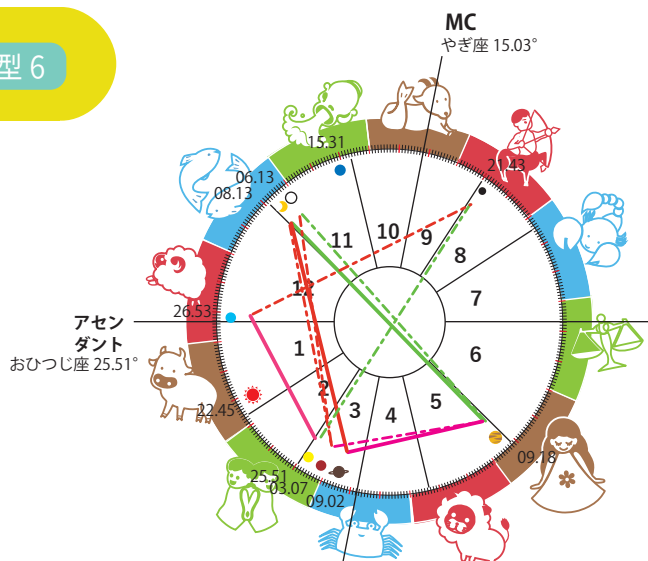
こいつに肉付けをすると…。

7 アスペクト

合を読む

文型 6

アスペクト					
0°	☾ ○				
180°	☾ ☼	☾ ☿	☾ ♀	☾ ♀	☾ ☼
120°	☾ ☼	☾ ☿	☾ ♀	☾ ♀	☾ ☼
90°	☾ ☼	☾ ☿	☾ ♀	☾ ♀	☾ ☼
60°	☾ ☼	☾ ☿	☾ ♀	☾ ♀	☾ ☼



	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	6. [] が、[] に、背後で知らぬ間に影響する。	



[**天王星の個人主義**] が、[**月の感情**] に、背後で知らぬ間に影響する。

ぼくの月はお座にあるので、人の感情を無意識にくみ取ったり相手の痛みを和らげようとしたりする質があります。

そんな月の背後に、天王星の個人主義が交っています。つまり、相手に親密な感情があくのと同時に「これは相手の問題であり、自分自身で解決することだ」と言ったクールな視点もあるのです。

[**天王星の場所、枠を超える力**] が、[**月の体**] に、背後で知らぬ間に影響する。

ぼくの月は12ハウス、見えない場所にあります。さらにサインはお座ですから、人の感情や見えないものには敏感ですが、形あるものにはあまり気持ちが向きません。

同時に、背後で天王星の「場所、枠を超える力」が影響しています。体という「場所」、枠を超えて、目には見えないもの、宇宙からの情報に鋭いアンテナが立ちやすいため、自分自身の体の反応やSOSには気づきにくいかもしれません。

「2パターンとは、中々やるじゃないか」

「へへ。正直『体のSOSを感じにくい』とか、よく分からないけどさ。かけ合わせて^{すりり}推理してみた！」

モックまは、一瞬チラリとこちらに目をやると「ふむ、間違っちゃいない」と静かに言った。

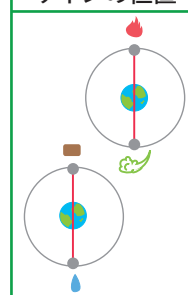
「さて…次は180度だ」

7 アспект

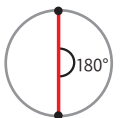
オポジション



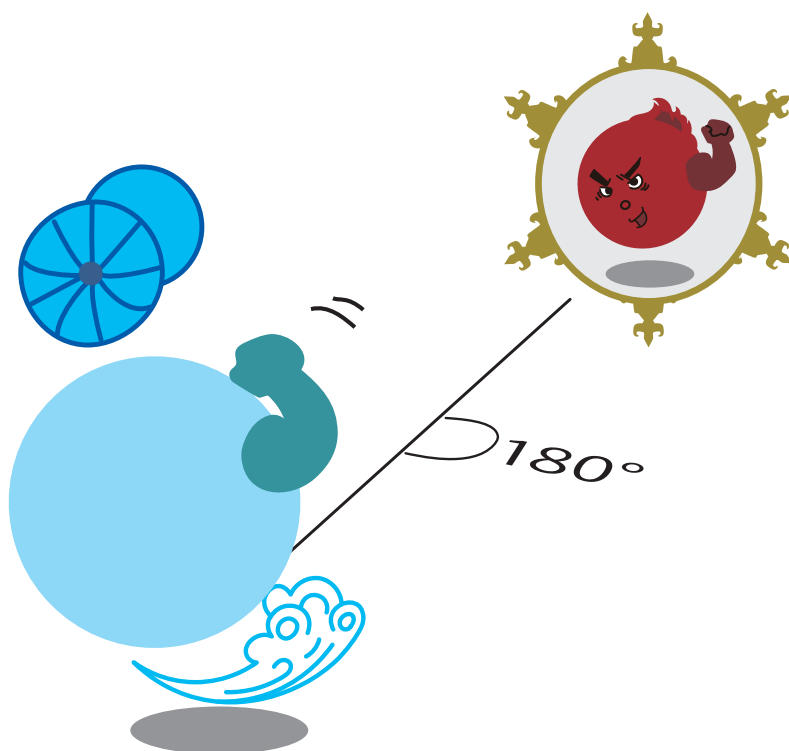
サインの位置



差し向かいの上位天体が「鏡の中の自分」に。
そのため常に相手の要求に、半自動的に応え続ける。

 オポジション	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	7. [] の要求に、[] が応え続ける。	

向こうの動きに
つい合わせちゃう。
気がつけば発言が
アグレッシブに！
エイエイオーッ！



「男女の区分は一致^{いっち}してるんだから調和を生みそうなの…」

「うむ。しかし 180 度は上位の天体が差し向かいでにらみを効かせているとも言える。

パワーに開きがあるほど、下の天体は自分の器を超えて頑張らなきゃいけないんだ。

そのためこちらも少々、葛藤のあるアспектだ」

「そうかあ」

「ただその分活発になりやすく、その天体同士ならではの活気生まれるのも特徴だ」

「上の天体にせっつかれて働き続ける感じだね」

「君の場合は…ふむ。冥王星と金星の 180 度。これを読んでごらん」

1

2

3

4

5

6

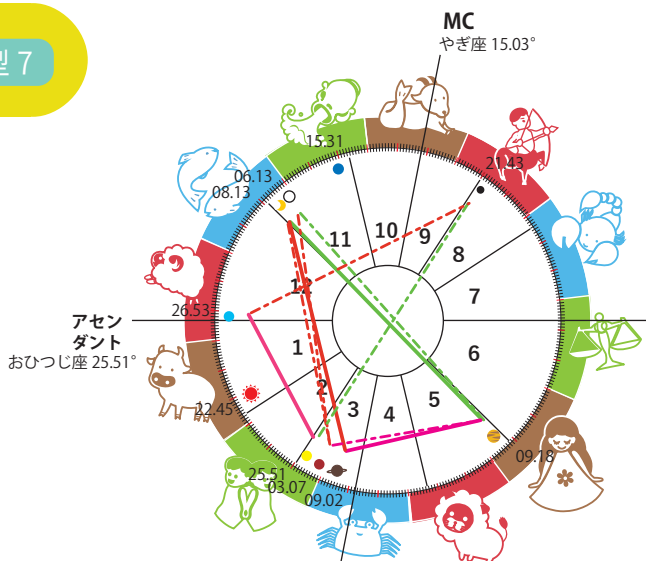
7

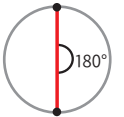
7 アスペクト

オポジション
を読む

文型 7

アスペクト									
0°	☾ ○								
180°	☾ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿
120°	☾ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿
90°	☾ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿
60°	☾ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿



 オポジション	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	7. [] の要求に、	[] が応え続ける。



[**冥王星の超強力で極端**] の欲求に、[**金星の趣味**] が応え続ける。

ぼくの金星は、3ハウス「学び」の場所にあり、ふたご座です。だからぼくの趣味は、学ぶこと。その金星に、向かいの冥王星が「極端なまでに強力であれ」と要求します。冥王星がいる場所は9ハウス「広い見聞への欲求」のいて座です。いて座は視野が広いサインです。そのため大昔の学問や哲学、また、長期的な視点が必要な天文学などに関心を持つサインです。だからぼくは、古代の人が使っていた星の動きを元にした、西洋占星術に夢中になり、極端なほどに没頭するのです。

「だからかあ。ぼく今まで勉強に熱中したことなんて、無かったもんな。ある意味、趣味だからこんなに熱心にやれるのかもしれないね」

「冥王星はそもそも個人には強すぎる天体だ。

趣味に没頭し打ち込むことで今までにない境地に辿り着ける反面、自分の月・肉体を忘れて、やり過ぎてしまうこともあるだろう」

「ははっ。正直傍から見たら、やりすぎ感満載かも」

「まあ、金星は月などと違いずっと働き続ける天体ではないから。趣味の時間は趣味の時間と意識的に区切りをつけて、集中して楽しむよう心掛けてはどうか」

「了解！」そう軽快に応じるべく。

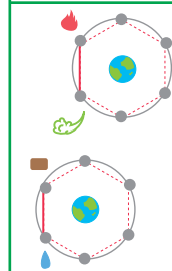
「さて次は、60度を見てみよう」

7 アспект

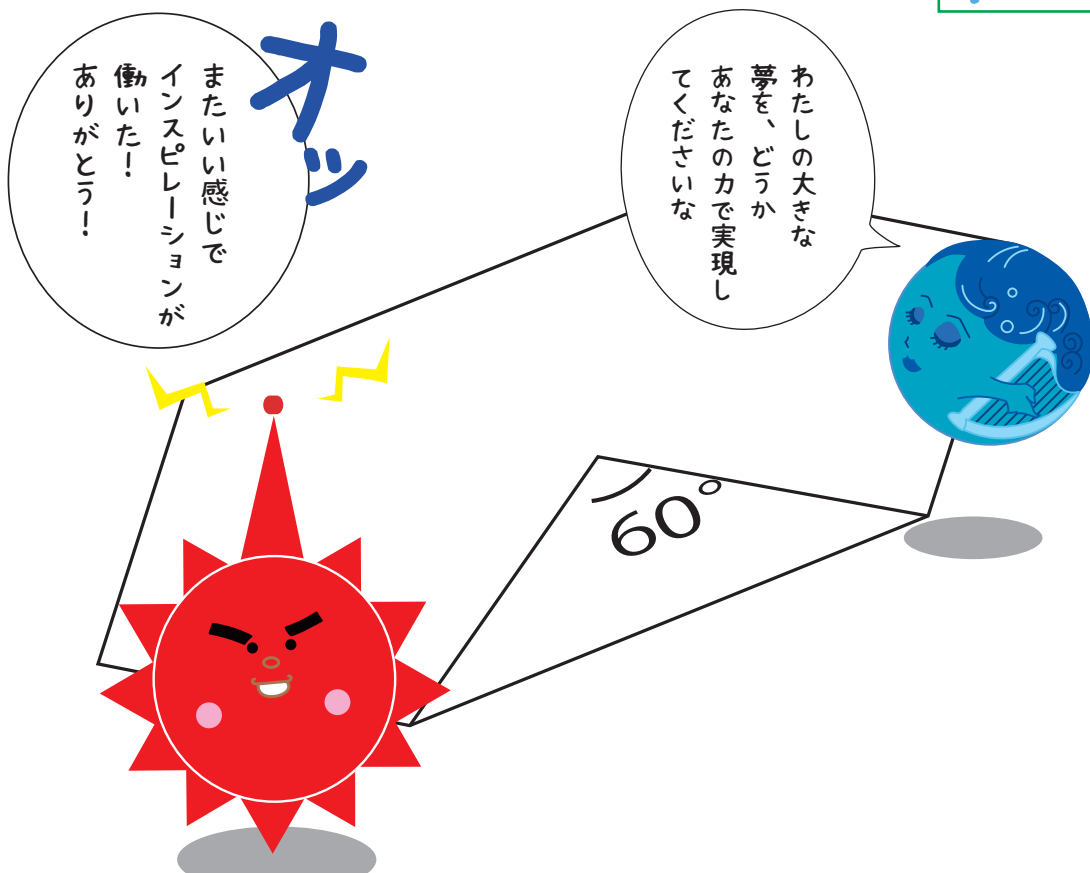
セクスタイル



サインの位置



互いの天体が協調し合い、
小さなクリエイティビティを生む。



1

2

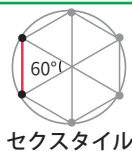
3

4

5

6

7



セクスタイル

上の天体 + 専門

下の天体 + 専門

11. []と、[]が協力し、[]を生み出す。

「60度は男女同じタイプの者同士。

180度みたいに真正面から向き合っていないから、
シリアスな感じも無い。和気あいあいって感じだね」
とぼく。

「うむ。じゃあ、君のチャートの…金星と水星を読むかい？」

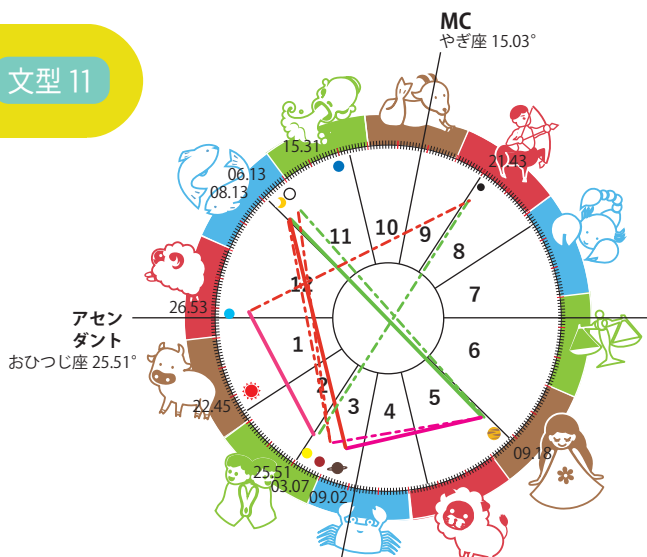
ぼくは頷き、ペンを握り直した。

7 アスペクト

セクスタイル
を読む

文型 11

アスペクト									
0°	☾ ○								
180°	☾ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿
120°	☾ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿
90°	☾ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿
60°	☾ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿	☿ ☿



セクスタイル	上の天体 + 専門 下の天体 + 専門	
	11. [] と、[] が協力し、[] を生み出す。	



金星の [美的感覚・社交性] と、[言語能力] が協力し [プレゼン能力] を生み出す。

● --- ● 180°

ぼくの金星は、冥王星の要求を受け、西洋占星術を猛烈に学び、打ち込みました。

● --- ● 60°

そこで得た情報を、60度のアスペクトを組む水星が協力し、わかりやすいレッスンを生み出しました。水星は的確に説明するのが得意。金星は図解などのデザインセンスがあり、視覚的な分かりやすさがウリ。この二つの協力関係から生まれたものは、プレゼン能力。だれにでも分かるようにセンス良く、かみくだいて伝える力です。

ぼくは、水星が「自分を主張する場所」にあるので、こうした活動をすることで、自分の個性がしっかりして、存在感が増していくでしょう。

「素晴らしい…」

「単に 60 度を読むだけじゃ、芸が無いだろ？」

だからさ。冥王星の力を受けた金星がどんな影響を水星に与えるのか。こいつも一緒に読んでみた！」

「しょう太。君は本当にプロの占星術家のようにないか！ よくここまで成長したものだ」

「へへっ。すごいだろっ！」

「いやいや…本当にいい感性をしている。」

冥王星から金星の影響を読み…。金星から水星の影響を読む。君が工夫した通り、複数重なったアスペクトを読むときには『最も上の天体が全体のアスペクトに影響する』といったルールがある」

7 アспект

複合アспект

いくつかのアспектが重なった複合アспект。^{ふく ごう}

180°、120°、60°など、複数のアспектが組み合わさっているケースは多いものです。

こうした複合アспектの場合、まず

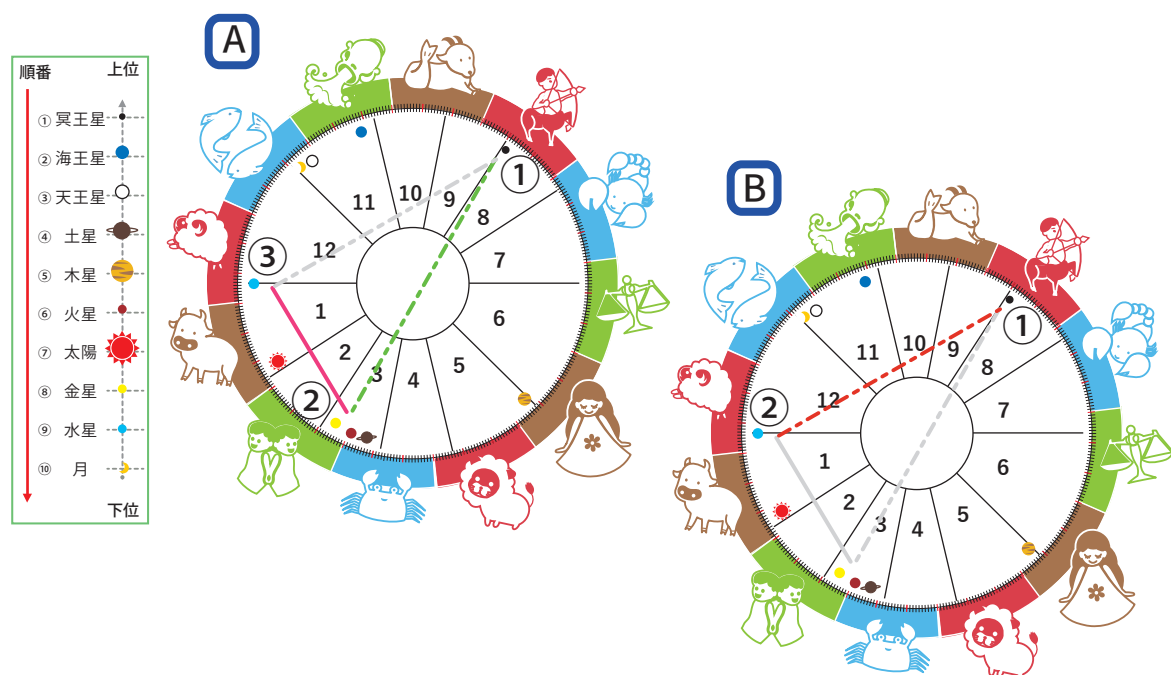
(A) ①冥王星 → ②金星 → ③水星

(B) ①冥王星 → ②水星

のように一番上位の天体を基準に分解します。

どちらも上の天体の影響から読み進め、最後に **(A)** と **(B)** を組み合わせて読むのです。

どんな複合アспектも最終的には上位の天体の影響が強く表れることを覚えておきましょう。



「なるほどー！

えっと、だったらぼくは、ここでさらに冥王星と水星の120度を読まないと！

120度は『同じ質のもの同士、調和を生む』だったよね？」

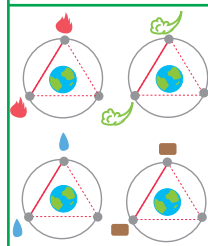
モックまはうなずいて、トラインの文型を提示した。

7 アスペクト

トライン



サインの位置



トラインは同じ質。上位天体は下位の天体に「Yes!」と言い、さらに自分の専門分野でサポート。

 トライン	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	8. [] が、	[] をサポートする。



冥王星の
[宇宙からの
情報] が、[水星の知性] をサポートする。

ぼくの水星はおひつじ座に在るため、そもそも理屈抜きで直感でものを理解するのが得意です。

● --- ● 120°

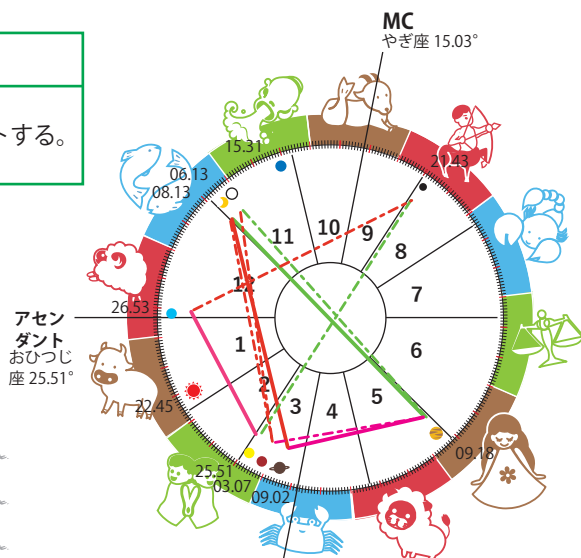
その水星を「冥王星の宇宙情報」がさらに 120 度でサポート。だから、本来なら人の理解を超えたような宇宙からの信号も直感的に「ピン」とくるのかもしれない。

● --- ● 180°

一方冥王星の力を受け、一心不乱に興味の学びに没頭する、ふたご座の金星があります。

● --- ● 60°

その金星が、水星に 60 度のアスペクトを組み、二つの天体の間で協力関係が成立しています。そのため、直感的には分かっていても説明するのが難しいようなことでも図解やイラストなどを使い、万人に分かりやすく伝えることができるのです。



「いいじゃないか!」

「やりましたよ! 先生!」

そう軽口をたたき、何度も声に出し読み上げてみせた。

「複合アスペクトも同じく人生の様々な場面で表れる

内面のゆれを示している。

それを活かすも殺すも君次第。しっかり理解して、積極的に魅力へと変換していったまえ」

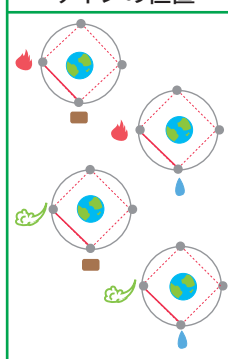
「分かったよ! じゃあラスト! 90 度、行ってみよう」

7 アспект

スクエア



サインの位置



上が下の天体に「歯止めをかける」か「過剰にあおる」。

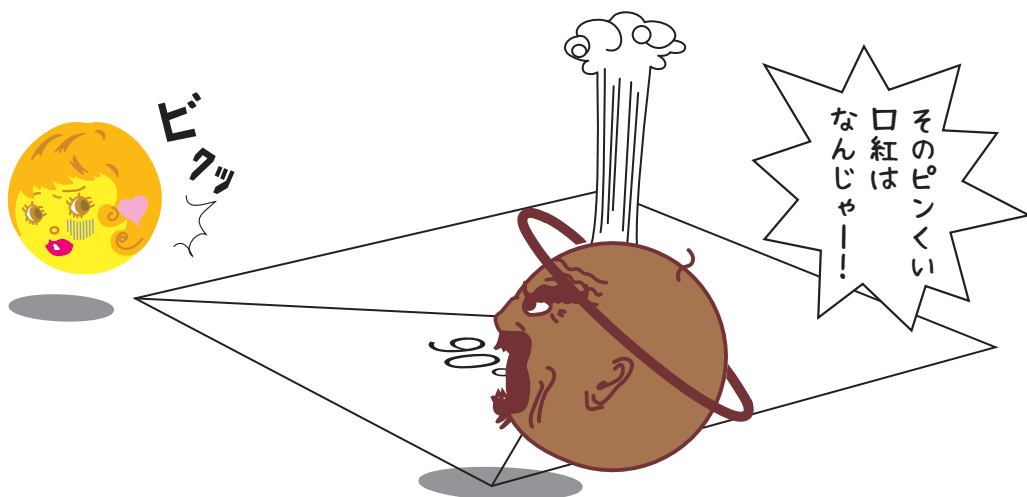
スクエアは、2天体のサインの位置が水と油です。

上の天体が未熟なうちは、異質なサインの元で働く下の天体に強いいら立ちを感じます。一方下の天体は上位天体に逆らうような動きをしてしまうことに、強い罪悪感を覚えるのです。

「いら立ち」と「罪悪感」はそのままあなた自身の感情となりますから、ストレスの多いアспектです。

ただ、異なる視点に立ち、横やりを入れられることで「そのつど新しい自分に更新できる」^{こうしん}大きな可能性を含んでいます。

スクエアは使いこなせた時の発展力が大きいので、文型を2種類、読んでみましょう。



スクエア	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	9. [] が []	に、歯止めをかける。 を、あおる。
スクエア 発展型	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	10. [] と、[]	を組み合わせ [] なる。 する。

「ふーむ…」

ぼくはうなり声を上げた。

「どうしたんだい？」

「なんか 90 度って大変そうだね」

「まあ…地球の占星術の歴史では 90 度はずいぶん嫌われていた時代があるようだ。

けれど我々木星人は、このアスペクトを多く持つ人に対し『チャレンジの人生』、そう称^{たた}えるむきもあるんだぜ。

まあぼく個人の意見としては、どのアスペクトもそれぞれ違った学びを提供してくれる、素晴らしい産物だがね」

「あのさ、ここに来て質問があるんだけど」

「なんだい？」

「今まで色んなアスペクトを読んできたけど…。

いまいち『アスペクト』イコール『内面のゆれ』ってのがピンとこないんだけど」

「そうかい？ まあ表現は色々あるがね。

例えば…ネータルチャートをお芝居に例えた場合。

10 の天体は『個性俳優』。12 サインは俳優たちに与えられた『衣装や役柄』。ハウスは『場面』。

そしてアスペクトは、その役者たちをどう動かすかを決める『シナリオ』を示す。

とかね」

「ああ、それなら分かるかも。つまりアスペクトはぼくらの『行動』を表してるってことだろ？」

「まあ、そういうことだ」

「『内面のゆれ』なんて言うからさ。ちょっと混乱した」

「しかし、しょう太。全ての行動は心の動きが最初にあるんだぜ？」

「え…」

「例えば。君は天王星と月が合。だからつい学校の先生や親に反発する。そうだったね」

「うん」

「そして天体たちは使っていなければ外に表れるから…。月と 120 度の土星がお母さんや先生の姿になって君に小言を言う」

「ああ、あるある！」

「けれどぼくから見ていると、彼らは君に對しやたら厳しいようには見えない」

「えーモックまだって聞いただけ？ さっきの母さんの小言！」

「ああ。廊下でのやりとりだね」

「いつもあの調子なんだぜ？ 最初っから怒る気まんまんなんだよな」

「ぼくにはただ、純粹^{じゆんすい}に心配しているように聞こえたが…」

ぼくは少しむっとして、「それはお前が他人だから…」と言い返す。

「君はぼくに対しても『四六時中怒っている』、そう言っていたじゃないか。だがぼくには怒った記憶など少しもない。ただ必要なことを伝えていただけ」

「じゃあぼくが勝手に怒られたつもりになってるってこと？」

ほお ふく
頬を膨らまし言葉を返す。

「いいかい、しょう太。これはアスペクトを理解する上でとても大切なことなんだ。

ぼくは何も君を責めてるんじゃない。君の中の反骨精神が人の忠告^{かじょう}に對し過剰に反応しやすい。

そう言っているんだ。

結果、傍^{はた}から見ていると君の態度が横柄^{おうへい}に映ってしまい、相手の怒りに火をつける」

「やっぱりぼくを責めてるんじゃないか。要是ぼくがぜんぶ招いてるって、そう言いたいんだろ？」

「これは君の、天王星と月の合がまねく『内面のゆれ』によるものだ。

大人の言葉の中に常識をかさに着た押し付けが隠されている。それを見抜いてしまうことで生まれる、反発心。

ただ、こうしたアスペクトの原理をきちんと理解したなら『四六時中怒られる』と思える現状を、改善できるはずだ。

とくに土星は月と120度。本来ならサポート的に働く角度だからね」

ぼくはムスツとしたまま、ノートを閉じた。

「なんかすごく責められてる気がする。もう寝る」

「ああ。君もそろそろ疲れが出てきただろう。今日は早めに休むといい」

そう言って、モックまはスクリーンボードのスイッチを切った。枕をぼんぼんと平らにし、自分のベッドへとよじ登る。

(あっさりかよ…)

内心不満に思いながらも、ぼくは電気を消した。

布団をかぶり、モックまに背を向ける。

「お休み」

そう背後で声がしたけれど、答えない。

はしゃいでいた時には気づかなかった疲労感が、次第に全身をつつむ。

窓の外で、チョビが小さく鳴いた気がした。

目を閉じたまま、耳を澄ます。

やがて庭の物置のトタン屋根に、雨の当たるかすかな音。その雨音に耳を傾けるうち、ぼくの意識は少しずつ薄れていった。

4月にしては小寒い、雨の夜だった。

1

2

3

4

5

6

7



ついにレベル3へ♪

1. URLを入れてクリック！

<http://moccuma.net/>



※「モックまの星のダイアリー」(<https://twitter.com/moccuma>) のトップ画面から入ることができます。

2. 「ホロスコープ」から入って  をクリック！

1. アスペクトを読んでみよう
2. ここまで学んだ全てを組み合わせ、「自分のカルテ」を作ってみよう！

もう君は
自分でどん
「問い」と
「答え」を
生み出せる
はず！
楽しんで！



35. スクエアと三沢先生

「三沢先生、ちょっと遅れるって」

放課後、教室でレッスンの準備をしていると、木野さんが傍ら^{かたわ}に来てそう言った。

「ん。先に美術室に行ってよっか」

と答え、二人廊下に出る。

木野さんはぼくの隣を歩きながら朗らかに笑って、「わたしすっかり占星術が面白くなってきちゃった」と言った。

「よかった。夢の実現には役立ちそう？」

「うん！ おとめ座の質って、つい出来てないところに目が行ってクヨクヨしちゃうけど。実はすごく勤勉で、コツコツやりぬく質だもんね。

これからはてんびん座を使って、出来てるところもバランスよく見てあげようって思ったの」

「さすが。もう使い方を分かってる」

微笑んで、そう答える。

「わたしの MC はみずがめ座にあるでしょ？ これも初めはピンとこなかったんだけど…。

そう言えばね。もしプロになれたなら…。

歌舞伎役者や舞妓^{まいこ}さんのメイクを可愛くアレンジして外国の人に教えたら、すごく面白いんじゃないかな、なんて思ってたの」

「すごい発想だ」

「でしょ？ YouTube とかで木野ルミ流メイクアップ！ とかって名前つけて配信したり…。

なんかさ。単なる妄想と思ってたけど実現できる気がしてきたんだ！」

彼女の明るい声は、いつだってぼくの気持ちを優しく

くする。

昨日のモックまとのやり取り以来トゲトゲしていた心が少しずつほぐれて、自然と気持ちが上を向くのが分かった。

「ねえ、今日は何を勉強するの？」

美術室の扉を開けながら彼女は言った。

「うーん…今日はね。ぼくらが取る行動は、実はネータルチャートが影響してるって話」

「へー面白そう！」

荷物を置き、大きな机に二人、並んで座る。

ぼくは早速タブレットを取り出して見せた。

「天体同士の角度で見るとね。

そいつを知ることによって、より積極的に行動できたり、自分の意志でイライラや罪悪感を手放して、新しい魅力を発掘したり。そんなことができるんだ」

興味深げにふんふんと頷く木野さん。

昨日ノートに写した図解を元に、アスペクトの仕組みについて説明する。

「じゃあ早速、木野さんのチャートを読んでみよう」

「えーできるかな？」

「大丈夫だよ。今まで学んできたことを思い出して、ね」

不安げな彼女を、励ますように言う。

木野さんは小さく頷くとペンを握った。幾度も書き直しやがて顔を上げる。

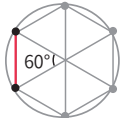
「出来たけど…なんか感想文みたいになっちゃった」
恥ずかしそうにノートを見せた。

7 アスペクト

セクスタイル
を読む

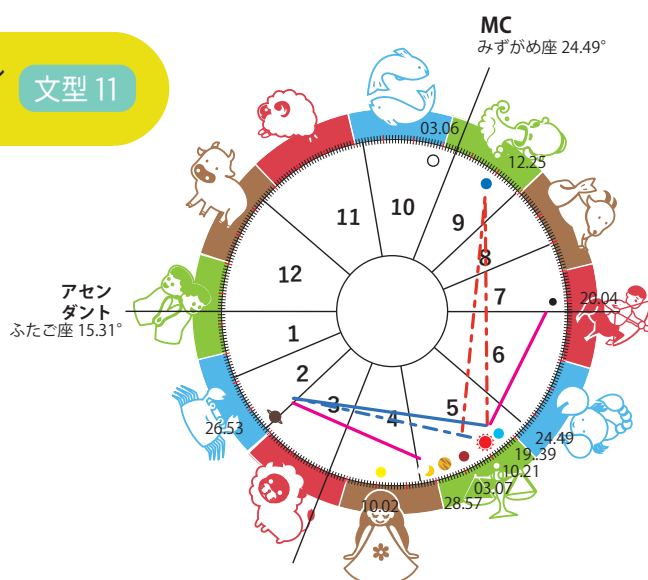
文型 11

アスペクト				
0°				
180°				
120°				
90°				
60°				

 セクスタイル	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	11. [] と、[] が協力し、[] を生み出す。	



土星の管理 と、月の習慣 が協力し、メイクの基盤、きれいな肌 を生み出す。



わたしの月は5ハウスのおとめ座にあり、同じ場所には太陽や火星、水星などの天体があります。

太陽をはじめ、たくさんの天体があることで分かるように、わたしの夢は芸能界など華やかな場所で働くこと。メイクアップアーティストになることです。

その夢は、まい子叔母さんがスキンケアの方法を教えてくれたことがきっかけでした。かに座は「育み」を示すサインで、そこに土星があり、その土星の管理の力が月の習慣に協力的に働きました。

まい子叔母さんの徹底したスキンケアを見て、その方法を聞いているうちに、年をとっても叔母さんみたいに綺麗でいたいと思うようになったんです。それ以来、毎日紫外線対策をおこたらず、正しい洗顔の方法を守っています。スキンケアが習慣になっているのです。

「すごくよく出来てるよ！」

「本当？」

「ああ。木星より上の天体になると、ぼくらはまだ自分の力としてこいつを使うのが難しい。だから目上の人が土星役や木星役を請け負って、現れたりする。

なので今はこの読みでOK！」

「そうかあ」

安心したように木野さんが頷く。

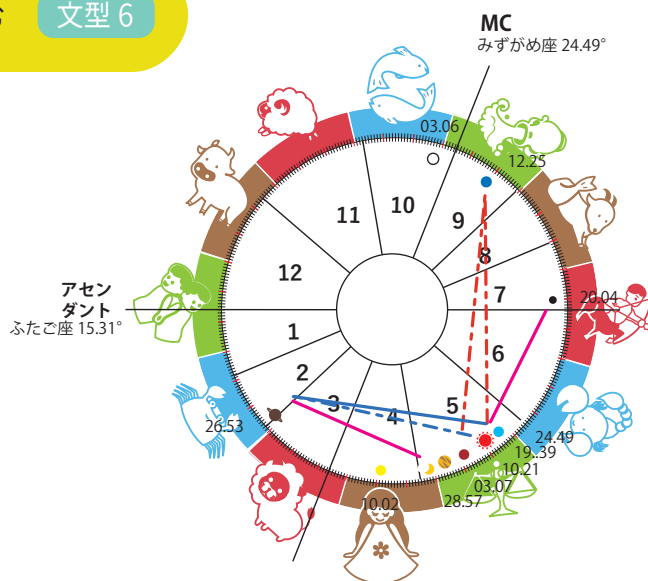
「じゃあ、次。0度のアスペクト。木星と月の合。これを読んでみようか」

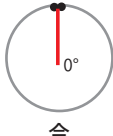
7 アスペクト

合を読む

文型 6

アスペクト				
0°				
180°				
120°				
90°				
60°				



	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	6. [] が、[] に、背後で知らぬ間に影響する。	



[木星の増大] が、[月の体] に、背後で知らぬ間に影響する。

わたしはオシャレなカフェが好きで、よく出かけていきます。そこでつい甘いものを食べ過ぎてしまいます。

それはもしかしたら、木星の増大が、月の肉体に知らない間に影響しているからかもしれません…。

[木星の豊かさ・寛大さ] が、[月の素の自分] に、背後で知らぬ間に影響する。

わたしはたまに、おおらかで優しいと友達に言われます。自分では細かいことが気になってイライラすることもあるので意外なんです…。でももしかしたらこれは、木星の豊かさ、寛大さが、月の素の自分に、知らない間に影響しているのかもしれない。

「お、二通り書いたんだ。

天体の専門性のかけ合わせは何通りもある。

そんな風に、思いついたものをどんどん記していく
といい」

「ねえ、岡田くん。ハウスで起きた課題を解決する方
法ってあったじゃない？」

「ああ、ルーラーを使うっていうあれだね」

「例えばね？この食べ過ぎて太っちゃう問題をどう
やったら解決できるかしら？」

「ええーぜんぜん太ってないけど！」

と思わず声を上げる。

とは言っても、こんな時の女の子はてんで聞く耳持
たないのも知っているからね。

天体とサインを見比べて、「まあ、方法は色々ある
よね。例えば天体が入っているサインを見て、ダイエッ
トに向いてそうならそいつを使ってあげるとか」

とアドバイスする。

「んー…おとめ座の月はなんだか向いてそんな気がす
る。健康管理、得意だもんね」

「具体的にはどんな使い方が浮かぶ？」

「おとめ座のルーラーは水星だから…」

木野さんはしばらく考えてパツと目を見開いた。

「あっ！そう言えば、その日食べたものを書き込ん
でいくダイエット方法、あったよね！」

「ふんふん…。記録を取るってのは確かにおとめ座ら
しいね」

「それだあ！」

「ぼくなら絶対三日坊主だけど。月がおとめ座の木野
さんなら続けられそう」

「うん。て言うか、むしろだんだん楽しくなりそう」

ぼくらは顔を見合わせ笑いあった。

「さて…三沢先生はまだかな。

二人のチャートを見ると、どっちも180度のアス
ペクトが無いんだよなあ」

タブレットに目を落としチャートを見比べる。

「そのアスペクト、岡田くんは持ってないの？」

「あるよ。天王星と木星、月と木星、それから…」

「ねえ、それ読んでみて！わたし知りたい！」

「そうだなあ…。

木星と天王星は社会天体とトランスサタニアン¹の組
み合わせだから、イマイチまだ実感が無いんだよなあ」

「将来こんな風になるんじゃないかって、予測して読
んでみるとか」

「なるほど…やってみようかな」

「じゃあわたし、月と木星の組み合わせ見てみる！」

「え、木野さんも読んでくれるの？」

「うん。これ全部覚えたら、友達やママにもやってあ
げるんだ！」

「分かった。じゃあお互いイメージを膨^{ふく}らませ、読ん
でみよう」

1

2

3

4

5

6

7

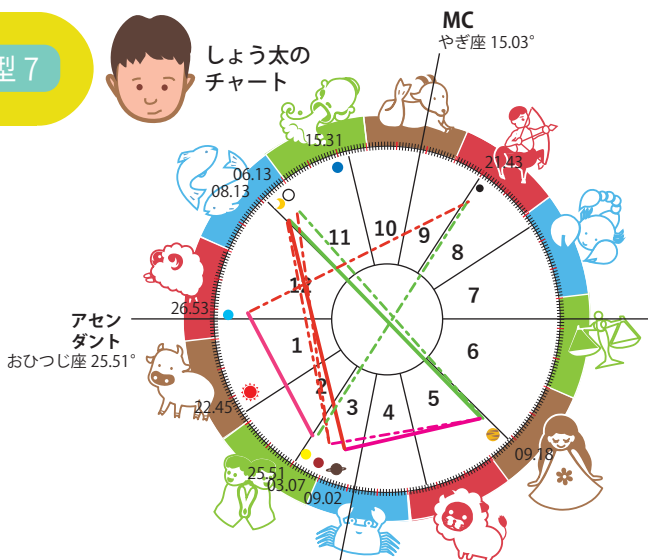
7 アспект

オポジション
を読む

文型 7



しょう太の
チャート



アспект					
0°	☾ ☽				
180°	☾ ☽ ☿ ♀ ☿ ☽				
120°	☾ ☽ ☿ ♀ ☿ ☽ ☿ ☽ ☽ ☽ ☽ ☽ ☽				
90°	☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼				
60°	☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼ ☼				

 オポジション	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	7. [] の要求に、[] が応え続ける。	



作

天王星の革新・
[エクセントリック] の欲求に、[木星の
増大] が応え続ける。

☼ --- ☽ 180°

岡田くんはとっても変わった男の子です。ぼんやりしているかと思えば、発言が時々とても鋭いのです。それは、天王星のエクセントリックな面や革新の要求に、木星が増大と言うカタチで応え続けているからだと思います。

☼ --- ☽ 180° [木星の増大] の欲求に、[月の
業の自分] が応え続ける。

その木星の力を今度は180°の月が受け取って、素の岡田くんがかもし出す雰囲気ですごく不思議な感じにさせているのだと思います。



作

天王星の
場所、枠を
超えることへ
[] の欲求に、[木星の発展] が応え続ける。

ぼくの天王星は、うお座の12ハウスにあります。12ハウスは見えない世界を表すため、形の無い繋がりであるインターネットを扱う場所でもあるでしょう。

だからぼくの天王星は、将来ネットで、アートや神秘的な分野で社会に革命を起こせと、向かいの木星に要求するかもしれません。天王星は元々の枠、規格を超え^{せきかく}る力がありますから、その仕事は本来の職務を超えたものかもしれません。木星はおとめ座の6ハウス。発信内容は意外に緻密で分析的で、実用性があるために、案外仕事としてルーティン化していく。そんな可能性もあるでしょう。

「おいー！エキセントリックってなんだよっ」

と笑って抗議^{こうぎ}するべく。

「えー岡田くん、相当変わってるよ？ 気づいてないみたいけど」

と舌をペロッと出す木野さん。

「そんなに変わってるかなあ…」

「うん、なんかね。宇宙人の友達が居るって言っても不思議じゃない感じ？」

ふっとモックまの顔が浮かび、「あれは別に友達じゃない。ただの居^い候^{そうろう}」と答える。

一瞬ポカンとこちらを見返す彼女に、ぼくは慌てて「み…みたいな返事がかえってきそう？」と切り返した。

「もう！ 一瞬本気にしたよう！ 超自然体で言うんだもん！」

そう言って、ぼくの肩を幾度も小突く。

「でも、さすがだなー。岡田くんはちゃんとサインやハウスも含めて読んでるもん」

「まあ…でもね。実際サインやハウスを抜きにして、天体だけの作用もあったりするんだ。

だから木野さんの読みも間違っちゃいない」

「そっか」

「信じたくないけど」

と冗談交じりに言葉を足すと、ぼくらはまた笑いあった。

＊

その時ガラリッと扉が開いて、「おう、待たせたな！」三沢先生が入ってくる。

「ちょうどよかった！ 今新しいところに入って盛り上がったところなの！ 先生のチャートも読んでみ

ましようよ」

木野さんは立ち上がり、そう呼びかけた。

「おお、ありがとよ。どれどれ…」

ぼくは改めてアスペクトについて説明をし、三沢先生と木野さんのチャートを並べて見せた。

「ふむ…。サポート的に働くのが 120 度かあ。

オレは美術だけはやめられない人間だからな。

美的感覚が専門の金星。こいつに組んでる 120 度が気になるな…」

「そうですね。じゃあ先生はそちらを。木野さんは…」

「海王星と火星の 120 度！ わたしこれ読んでみる！」

「OK！ 二人とも、今まで学んだハウスやサインも思いだしてね」

木野さんも先生も自分の夢に関わることだからね。真剣にチャートを見つめアスペクトを読んでいる。

やがて木野さんが手を挙げた。

「よし。できたぞ！」

と、三沢先生も続く。

1

2

3

4

5

6

7

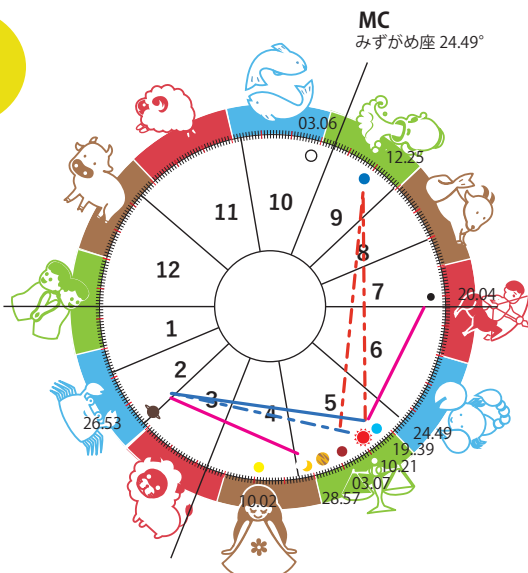
7 アスペクト

トライン
を読む

文型8

アスペクト				
0°				
180°				
120°				
90°				
60°				

アセン
ダント
ふたご座 15.31°



 トライン	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	8. [] が、 [] をサポートする。	



[海王星の夢見] が、[火星の活力・情熱] をサポートする。

わたしの火星はてんびん座の5ハウスにあり、同じ場所にある太陽の、メイクアップアーティストになる夢を力強く引っ張っています。

その火星を、みずがめ座の海王星のインスピレーションが、サポートしているのです。例えばわたしはいつかプロのメイクアップアーティストになって、舞妓さんや歌舞伎役者さんのお化粧を、わたし流にアレンジして世界に広めたいという夢を持っています。

みずがめ座の常識を超えた発想に、海王星のアーティスティックな感性と、夢見の力が合わさり、火星の情熱をさらに高ぶらせているのです。

[海王星のインスピレーション] が、[火星の集中力] をサポートする。

それから、もう一つ。わたしは一つテーマを決めて、自分の顔をベースに色んなメイクを試してみることがあるのですが…。月と金星のおとめ座のせいかな？大抵は、基礎に忠実で、あまり面白みのない仕上がりになるのです。けど一度だけ、すごくぶったんだ面白いメイクが出来たことがあって…。その時はちょっとゾーン状態のような感じで、とても強い集中力を発揮したんです。あれはもしかしたら、みずがめ座にある海王星のインスピレーションが、火星の集中力に、サポート的に働いたのかもしれない。

7 アспект

トラインを
読む

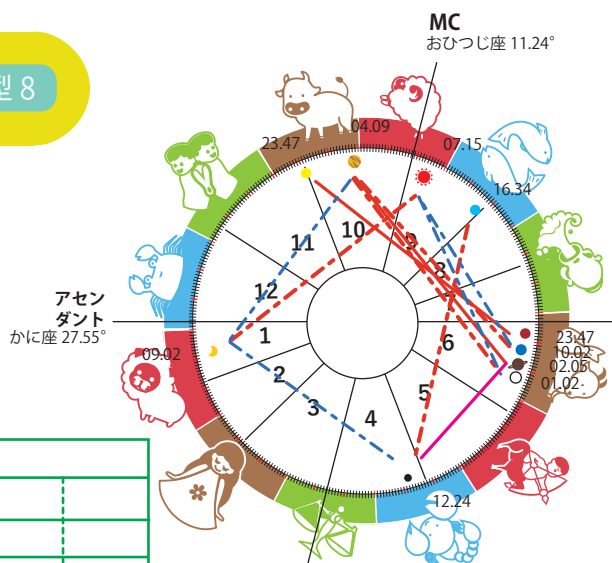
文型 8

アспект									
0°									
180°									
120°									
90°									
60°									

 トライン	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	8. [] が、[] をサポートする。	



[**火星の集中力**] が、[**金星の美的感覚**] をサポートする。



オレの金星は、自分の五感をじっくり味わいながら形にするおうし座にある。おうし座は不動宮だからこみえて長時間集中して制作する力は、もともとあると思う。そこに火星の集中力が、さらにサポート的に働いている。

ただしオレの火星はやぎ座の7ハウスにある。だからおうし座の金星の個人的な表現の欲求を、さらにあおるのではなく、いかに社会に通用するよう、人々に求められるようブラッシュアップするか、そのための集中だ。正直オレは人からどう見えるかを意識するのが苦手だ。月のしし座も太陽のおひつじ座もまだ若いサインで、自分を表現することでせいっぱい。人からどう見えるかなんてことに関心が無いからだ。だからこのやぎ座の火星による金星のサポートが、絵描きとして社会でやっていく、一つのカギになると思う。

ぼくはまず、木野さんの文章に目を通した。

「なるほどー。このアイデアは、海王星と火星のコラボで生まれたものなんだ」

「うん。なんかね。これ想像するとカッカッって体が熱くなるような感じがあるの。」

「よーし！ やるぞー！ みたいな。ちょっと野心的な感じ？」

「それは確かに火星っぽいな。面白い。どの天体が働くかで、体に表れる感覚が違うんだね」

彼女は頷き、今度は一緒に先生の書いたものを覗き込むと、感嘆かんたんの声をもらった。

「わあ…！ 先生、昨日お家で勉強したでしょ！？」

「ん…まあな。ちょっと真面目に復習した」

「なんだか、どんどんやる気が出て来てるようですね！」

気持ちが高揚し、少しせっつくように言葉を返す。

「ああ、まあ…。昨夜どうにも眠れなくてな。スペインのことも色々調べ直していた」

言いながら口ひげをいじり少しぼんやりとした表情だ。

「もう、向こうに行くって決めたんですか？」

木野さんが無邪気に尋ねる。

「そうだなあ。オレが出した結論けつろんは、やっぱり日本で頑張ろう、と言うことだな」

驚いて、ぼくは先生の顔を見返した。

「しばらくって…いつまでですか？」

そう尋ねる。

「うーん…。もうオレは30だからなあ。この場所つちかで培ったものも在るし、近頃じゃ画展の手伝いも頼まれ始めていてな」

「でも、スペインにあんなに戻りたいって言ってたの

に…」

残念そうに木野さんが言う。

「まあな。」

しかし当時とはスペインの状況もまるで違うんだ。

オレが行ってた時分にゃそりゃあ好景気だったが、バブルがはじけて今じゃひどい不況だ。

スペイン人ですら職にあぶれるほどだからな。名も無い絵描きが行って一旗ひとしたあげられるような状況じゃない」

「でも…先生のネータルチャートにはこんなにハッキリ、スペインで絵描きになる夢を追ったらいいって出ているじゃないですか」

ぼくは静かに言った。

「まあ…お前らはそう言ってくれたがな。」

読み方によっちゃだぞ？

オレは現実主義のやぎ座に四つも天体があるんだぜ？ 今の向こうの社会情勢や自分が培つちかった日本での基盤。そう言うものだって重要なんだよ。

それだってお前の言葉を借りりゃ『才能』の一つだろう？」

「・・・」

先生はもう心に決めている。決めたことに後から理屈をつけてるんだ。占星術を使って。

そう思うと、ぼくは無性に腹が立った。

才能があって、ネータルチャートにはその後押しが細部にわたって記されているのに。「行かない」という選択を正当化するために、やぎ座の質たてを盾に言い訳をする。

ぼくにはそんな風に聞こえた。

「やぎ座の質は別に…現実主義を理由に夢から逃げるための道具じゃありませんから」

思わず、鋭い言葉が飛び出してしまう。

「…ねえ、岡田くん」

木野さんが少し青ざめて、ぼくの袖^{そで}を引っ張った。

ぼくは我に返って「ごめん」と小さく彼女に言った。
「岡田。お前がオレのこと、親身になってくれてるのは知ってるぞ。」

占星術だってな。自分を知る上でごく役立ってる。
これからの人生、何倍も面白くなりそうだ。そう感じ
てるんだ」

先生はぼくの言葉に堪^{こた}えた様子もなく、まるで慰^{なぐさ}めるようにそんなことを言った。

内心余計にいら立ちを覚えたけれど、心配そうに見
ている木野さんを思って、

「はい。ちょっと熱くなりました。先に進めましょう」

とタブレットに目を落とす。

木野さんはホッとした様子で、

「そうだよ。90度のアスペクト！

今度はこれよね？ わたしに一つ、先生には四つも
在るみたいだから、ねえ読むのが楽しみじゃない？」

とぼくらの顔を見比べる。

「うん。そうだね。」

90度は実は今日勉強するアスペクトの中で、最も
葛藤^{かつとう}を生む角度なんだ。

上の天体が下の天体を否定して『歯止めをかける』。
あるいは『過剰^{かじょう}にあおる』。そのどちらか。

サインは男タイプと女タイプのかけ合わせで異質な
もの同士だから。強い反発が起こるんだな」

「ええー。そんなアスペクトいらないよお」

と、嘆く木野さん。

「いや、でもね。このアスペクトは上手く使えば、と
てもクリエイティブな力を発揮するらしいんだ。」

異質なサインを持つ天体同士が上手く協力するよう
になると、お定まりの考え方や感情に時にテコ入れが
起こる。

だから90度には『この両者をかけ合わせたら、何
が生まれるか』そんな発展型の文型も用意されてるん
だ」

「ほお。そいつは面白そうだな」

三沢先生が相づちを打つ。

ぼくは小さく頷いて、

「じゃあ木野さんは水星と土星の90度を、先生は、
そうですね…。太陽と海王星を読みましょう」

と言った。

今回は二人ともずいぶんと時間がかかった。

やがて木野さんが自信なさげに手を挙げる。

続いて先生もペンを置き、渋い顔を上げた。

1

2

3

4

5

6

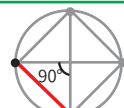
7

7 アスペクト

スクエアを
読む

文型 9・10

アスペクト			
0°			
180°			
120°			
90°			
60°			

 スクエア	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	9. [] が []	に、歯止めをかける。 を、あおる。



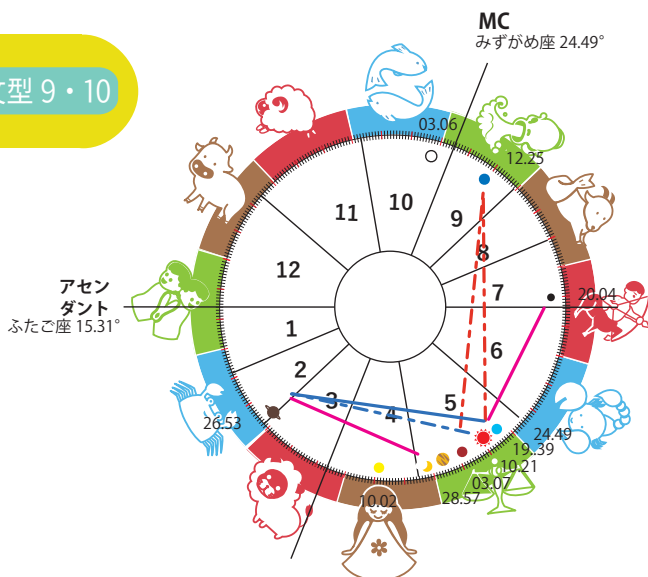
[土星の管理] が、[水星の計算能力] に、歯止めをかける。

わたしは小学校低学年の頃、そろばん塾に通っていました。国語や社会は得意でしたが、算数がすごく苦手で、お父さんが心配したためです。そろばん塾ではいつもドベから数えた方が早く...

どんどん自信が無くなっていった気がします。

塾の先生が、出来た子をほめて出来ない子に冷たくするようなところがあり、それで余計に意欲が薄れていきました。一時、紙に書いて計算する足し算引き算すら、嫌になったことを覚えています。

これは土星の管理・指導の力が、風通しの良い関係で、気楽に学びたいてんびん座の水星に厳しく働いて、かえって発達に歯止めをかけたのだと思います。



7 アспект

スクエアを
読む

文型 9・10

アспект									
0°									
180°									
120°									
90°									
60°									

 スクエア	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	9. [] が []	に、歯止めをかける。 を、あおる。



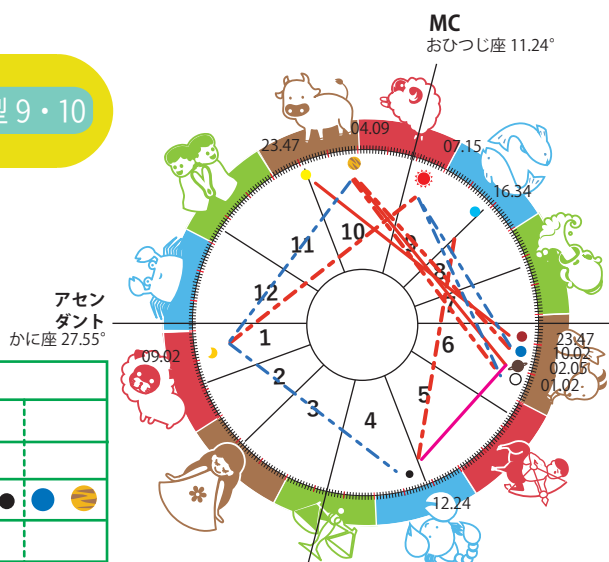
[**海王星の夢見の力**] が [**太陽の自我**] を、あおる。

オレの海王星は、やぎ座にある。だから社会に影響を与えるような現実的な領域で、大いに夢を抱くところがある。その力が、おひつじ座の太陽の自我を、90度であおるためオレは過去の人生で、ときどき無謀なチャレンジをしてきた。自己流の方法で、一かく千金や知名度アップを狙って、猪突猛進でトライするのだ。ことごとく失敗したのは言うまでもない。

スクエア 発展型	上の天体 + 専門	下の天体 + 専門
	10. [] と、[] を組み合わせ []	なる。 する。

[**海王星の夢見の力**] と、[**太陽の自我**] を組み合わせ [**新しい自分に**] なる。
する。

組み合わせで何が作り出せるのか、正直見当もつかないが..。しいて言えば、やぎ座海王星が見せる夢見がちなビジョンは、空想の範囲に留めておく。おひつじ座は夢見がちな野心を形にする力は乏しいので、最初の行動の動機付けの範囲に留めてはどうか。



1

2

3

4

5

6

7

「なるほど…」

と頷くべく。

木野さんは頬杖をつき、

「この二つを組み合わせて、なにか発展的なことができるなんて想像もつかないよー…」

音を上げるようにそう言った。

確かに…。

かに座の土星とてんびん座の水星。

このかけ合わせは強い葛藤を生むように思った。

さらに木野さんの経験から、彼女自身がその活用方法を見出すのはそう簡単じゃないだろう。

「そうだね…うん」

ぼくは言葉を濁した。

昨夜レッスンの途中で自分から切り上げたことを、少し後悔する。

続いて先生の文章に目を通した。

＊

ぼくは何とも複雑な気持ちになった。

先生はまた、おひつじ座の太陽を現実主義のやぎ座という容器の中に押し込めようとしている。

そう反発する一方で、おひつじ座の太陽とやぎ座の海王星、この二つの上手いかけ合わせなど、とても想像できないのだった。

ずっと黙っているわけにもいかず、ぼくは仕方なく口を開いた。

「…最初の文は良くできています。けれど後の文…。この文章だと、海王星の夢見の力も太陽の自我も、本来の力を発揮しないまま終わっている、そんな印象なんですよね…」

「うむ…。しかしなあ。実際、無謀なチャレンジで、どれだけ痛い目に合ったことか。

そう考えるとこの二つの天体同士は、ちょっと抑え気味にするくらいでちょうどいいんじゃないか？」

「そんなことはあり得ません。どんなアспектでも力をフル活用する方法があるはずですよ」

と言葉を返したが、だからと言ってベストな活用方法が思いつくわけでも無かった。

「ねえ。他の90度も読んでみたら？先生、いっぱい持ってるし…」

気を使ってくれたのか、木野さんがそんな提案をする。

「そうだね…。

太陽も大切だけど、月はその人の根っこの部分を表すから。月と冥王星、この90度を読んでみましょう」

「うーん。しし座の月に、さそり座の冥王星か…」

先生が、チャートの月と冥王星を指でなぞる。

「冥王星はさそり座のルーラーです。だから最もこの場所で力を発揮することになります。

場所は4ハウス…」

「お家とか、一番安らぐ場所よね？」

と木野さん。ぼくは頷いて、言葉を続けた。

「冥王星はその人のたましいの成長のために、あらゆるものを壊す天体です。

もしこれが月じゃなく太陽だったら…。その人が心に決めた夢と、たましいが決めている夢。この二つがちぐはぐなことが多いようです」

「ちぐはぐ？」

「そうです。若い頃に抱いた夢、つまり太陽の意志と、潜在的にたましいが決めている夢、この二つにズレがある。

だから冥王星は、人生のどこかの地点で『太陽の夢』を壊すことになる。

仕事とか、環境とか、経験とか…。

ときにその力は健康にまで及ぶこともあるようです」

「うわー…すごい天体ね、冥王星って」

「うん。冥王星は個人の悩みに一切関心がない。

身を粉にして働いているとか、社会で〇〇を築き上げたとか。必死で耐え忍んで頑張ってるとか。

そういうことにまったく興味を示さないんだ。

それよりも、たましいの成長、生まれる前に決めてきた夢、そいつを全うすることだけにコミットする。

けれど冥王星は、ただやみくもに壊すんじゃない。破壊と同じだけ再生する力があるんだな。

だからこの星とアスペクトを組む天体は、それぞれの専門分野で、起死回生を果たすことができるんだ」

先生はしばらく押し黙り、チャートを見つめていたけれど、やがてかすれた声で言った。

「…そいつが月に90度ってのは、いったいどんな影響なんだ？」

「だから…それを先生が読んでみてください」

いら立ちを抑えながら、そう答える。

先生は、はあ…と一つ、大きくため息をついた。

「たましいの成長のために、壊す…か」

そしてまた、沈黙。

ぼくはイライラしながら、言葉をたたみかけようとしてハッとした。

口をつぐむ。胸が、早鐘^{はやがね}を打つ。

「…岡田。悪いがオレあ、ちょっとこいつが無理のようだ」

低い声でそう言うと、三沢先生は立ち上がった。

左の義足の関節がキシッと音をたて、ぼくの胸に突き刺さった。

「あ、あの…先生…」

大きな背中に呼びかける。けれど先生は何も言わない。ゆっくりと歩きだし、教壇^{きょうだん}の前を横切る。

扉に向かう横顔はひどく青ざめて見えた。

先生の眼はうつろだった。

無気力で、無感動で、惰性的な灰色の瞳。あの描きかけのキャンバスを包んでいた濁った粘膜^{だ せい}のようなベールを、ぼくはこの時先生の瞳の中に見つけたのだった。

36. 全てを失った夜。全てを取り戻した朝

昨夜からの雨はまだシトシトと降り続いていた。

傘が重い。

体中の気力が抜けていくようなダルさを覚えて、ぼくは小さく立ち眩^{くら}みがした。

先ほど別れた木野さんの言葉が、心に冷たくのしかかっていた。

＊

「あんな言い方、ないよ」

彼女はぼくの目も見ないで、そう言った。

「あんな風に押し付けるんだったら、わたしもう岡田くんに習いたくない」

その言葉はしごくまっとうな主張のように、ぼくには聞こえた。

何も言わず、黙って木野さんの少し後ろを歩いてい

1

2

3

4

5

6

7

く。返す言葉を探すわけでもなく、謝るわけでもなく、
ぼくはただ歩道を歩いた。

やがて互いの家へと分かれる T 字路^{じろ}に差しかかる。
木野さんは振り返らない。

ぼくらはそのままチラとも視線を交わすことなく、
別れたのだった。

＊

なぜ、思い至らなかったんだろう…と幾度も考える。
先生のチャートの冥王星。

あの星が、家庭環境を表す 4 ハウスに在ることに。
その天体が、幼少期を示す月にスクエアを組んでいる
ことに。そこに生まれる一つの可能性に。

なぜ注意を払わなかったんだろうか。
もちろん同じ条件のネーターチャートはきっといく
らでもある。その全ての人々の子ども時代に、激しい
事故やケガがあるわけじゃない。
過酷^{かこく}な幼少期^すを過ごしているとも限らない。でも…。

(ぼくは知っていたじゃないか。先生の脚のことを…)

そう心の中でつぶやいて、深くため息をついた。
やりきれない、と思った。
でも妙なことに、ぼくはその感情にどっぷり^{ひた}と浸る
ことが出来ないでいた。頭の中にはもう一人ぼくがい
て、耳元でこう囁く^{ささや}。

思いだせ、と。
この、どこまでも自分を責め立てる感情を、お前は
遠い昔に経験している。
さあ、思いだせ、と。

首を振った。
自分のことなどどうでもいい。そう思った。
ぼくは大切な人を傷つけてしまったのだから。

あの人の人生を何も知らないくせに、ちょっと習っ
た知恵と知識を振りかざして、心の深い処にずかずか
踏み込んでしまった。

(占星術なんて…習わなきゃ良かったんだ)
と、ふいに過^{よぎ}った。

でもぼくはこの言葉が、自分の行動ではなく使った
道具のせいにする、逃げ口上であることを知っていた。
何かのせいにして片づけるには、ぼくはもう占星術を
知りすぎていた。

モックまなら、何と言うだろうか。
さすがに慥^{しやう}すいしきったぼくを見て、優しい言葉の
一つでもかけてくれるだろうか。

いやそれよりも。今度三沢先生に会った時に、どん
な言葉をかけたらいいかアドバイスをくれるだろうか。
しばらくしてぼくは小さく首を振った。
きっとアイツならこう言うはずだ。

「やれやれ。そんなに自分を責め立てて、君の月ちゃ
んがおいてきぼりじゃないか」

どんな失敗^{おか}を犯しても、どれほど誰かを傷つけてし
まっても、自分を責めないこと。

責任を取っても、責任を感じて苦しまないこと。
こんな時だからこそ、誰かを傷つけてしまったこと
に一番傷ついている君の心、月ちゃんに、まずは寄り
添^そってあげるんだ。

無性に、モックまの顔が見たいと思った。

自分で自分の月に寄り添う前にアイツのとぼけた顔を見て、ホッとしたい。

そう思うと、少しだけ傘を持つ手に力が戻ってくるような気がした。

＊

家に帰ると珍しく母さんがいた。

薬局の仕事は休みが不定期で今日はたまの休日のようにだった。

「しょう太、ちょっと話があるんだけど」

台所で食器を洗っていた母さんは、手を止めぼくの方を振り返った。

「ぼく、疲れてるんだけど」

と力なく答える。

「いいから。取り合えず着替えてらっしゃい」

そう言われ、ぼくは黙って自室へと戻った。

部屋に入るとベッドの上も整理棚も、妙に片づいている。

ドキリとした。

慌ててモックまのベッドがある勉強机にかけ寄ったけれど、姿はない。

机の引き出しを開ける。そこも綺麗に整頓され、占星術をまとめた用紙やノート、そしてモックまの乗り物の、あの灰皿も見当たらない。

一瞬アイツが帰ってしまったのかと思ったけれど、玄関先に積み上げられたゴミ袋を思いだし、部屋を飛び出した。

在った。

粗大ごみの袋の中に、汚れた毛布や衣類と一緒に、モックまとあの灰皿が入られている。無造作に、背

中から逆さにして詰め込まれたその姿は、まるでいらなくなった小さなぬいぐるみのようだった。

ぼくは慌ててゴミ袋をほどき、モックまと灰皿を取り出した。

後ろから母さんの声がした。

「あなた、一体何してるの」

激しい怒りで背中を震わせながら、立ち上がる。

「勝手に部屋に入るなよ！ ぼくが大事にしてるもの、なんで捨てんだよっ！」

母さんは一瞬面食らったような表情をし、見る間に顔色が変わると、

「たまには掃除でもと思ったんじゃない！ なあに？ その口のきき方！」と怒鳴り返した。

「たまにはってなんだよ！ 普段完全放置なくせに！

ぼくが何が大切で、何に迷ってるかなんて何も知らないくせにっ！！」

母さんは怖い顔でぼくを見つめていたけれど、しばらくしてノートと紙の束を差し出した。

「あなたの大切なものって、これ？」

それはぼくがこの数日間ですべて、占星術の資料だった。無言でそいつをひったくろうとする。

母さんは手を引っ込め、「最近遅くまで勉強してると思ったら、あなたこんなことしてたの？」そう言った。

ぼくはもう怒りで気が遠くなりそうになりながら、それでも何とか冷静に「だったらなんだよ」と言葉を返した。

「学校のお友達と夕方までやってるのって、これ？」

「だから…だったらなんだよっ！」

と声を荒らげる。

母さんはまるでその声につられるように、「こんなことしてるヒマがあったら勉強なさいっ！」と大声を

1

2

3

4

5

6

7

あげた。

「勉強しなきゃ、仕事にあぶれるから?! 仕事にあぶれたら、父さんみたいに苦労するから?!

そうやって、どんだけ人を追い込めば気が済むんだ! 父さんだって…」

言いかけて、ぼくは言葉を切った。母さんの顔色が急に変わったように見えたからだ。

「父さんだって、何なの…?」

静かにそう問い返す。

ぼくはもうほとんど自分を抑制^{よくせい}することができない。もう…本当にもう、どうにでもなってしまえ!

心の中でそう叫んだ。

「父さんだって…そうやって母さんが追い詰めるから出てったんだ。やりたいことも我慢^{がまん}して、家族のために頑張ってたのに。母さんが追い込むからここにいられなくなったんだ!」

ぼくらのやり取りが聞こえたんだろう。いつもなら我関せずの姉ちゃんが、自室から出てくる。

母さんの横に寄り添うように立つと、「しょう太、あんたちよつと言ひすぎだよ」と言った。

「うるさい、うるさいっ!! ぼくだってこんな家、居たくなかった! 何も相談なく離婚して、勝手に父さんを追い出して、ぼくは本当なら、本当なら…父さんで行きたかったんだ!!」

姉ちゃんが、凄^{すご}い剣幕^{けんまく}で何か怒鳴った。

その声が、もう耳に入らない。ただただ母さんの口元を嚙^かみつかんばかりに睨^{にら}みつける。

その唇は小刻みに震えてかすかに開き、何か言おうとした様だったけど…。やがて荒れた両の手が、その口元を覆^{おお}い隠^{かく}した。

一瞬、ぼくは泣きそうになった。

玄関の方に後ずさりドアを開ける。そしてそのまま雨の中へ、勢いよく飛び出した。

＊

その後のことは、正直あまり覚えていない。

気が付いたときには自分のベッドに横たわり朦朧^{もうろう}とした意識の中をさまよっていた。

姉ちゃんが後から教えてくれたことだけ…。

ぼくはあのまま雨の中を走って、例^{たと}の多頭飼^{とうか}いの家の前で犬に吠えられ、大きく転倒^{てんとう}したんだそうだ。

たまたまそれを見ていた近所のおばさんが、すぐに母さんと救急車を呼んでくれた。

幸い打ちどころは悪くなかったけれど、ぼくはひどく熱を出し、そのまま寝込んでしまったのだった。

熱は、中々下がらなかった。

夢を、見ていたと思う。

眠ったり目覚めたりする、うつろな意識の中で、心の奥深くへと、ゆっくり降りて行く時間。それは、ずっと忘れていたうお座の月と一体化する、優しくも混^{こん}んとした時間だった。

＊

「ええっ! ぼくの12ハウスにある天体って…月なの?!」

いつだったか早起きをして、占星術の勉強をするべくに小さくながまが教えてくれた事がある。

まだハウスをちゃんと習う前。

「12ハウスに在る天体はあの世に行ってからしか使えない」そんな自己流^{かいしやく}の解釈をしていた頃だ。

「月って心だろ？ ヒトとして絶対欠けちゃいけない
トコだろ？ そんな超基本スペックが 12 ハウスって。
自分の心、どこに置いてきちゃったんだよー！」

小さいくまは、ふふっと笑って「まあ、確かに。
12 ハウスに月があると時々心の在りかを見失う、そ
んなことは在るかもしれないね」と言った。

「それってここが『見えない場所』だから？」

モックまは頷いて、「まあ…とは言え、そもそもう
お座は 12 ハウスと相性がいいからね。自分の心の奥
深くへ潜り大切な感受性を取り出してくる。そんなこ
とも得意なはずだよ」と言葉を返した。

「…『見えない場所』って、心のことなの？」

「それもある」

そう言って、チラリとぼくに目をやる。

「しかしそろそろ君も気がついてははずだ。形ある
この現実世界にだって『見えないもの達』が存在して
いることを…」

「まあ、例えばお前とかね」

「そうだね。大人には、ぼくはただのぬいぐるみだ」

「後は電波とか！」

「うむ。例えばネットのコミュニティなども形あるも
のじゃない。だから 12 ハウスの領域だ」

「そう考えると、いっぱいあるかもしれないね」

「他にも…おそらく君はあらゆるものを感知している。

ただね。12 ハウスに月がある人は周囲で起きてい
ることが全て自分のせいだと思ひやすい」

「…そうなの？」

「家族や仲間たちの間でケンカやもめ事が起きたとき。
自分と外の境界線が曖昧な分、そのエネルギーを自分
発信だと勘違いしてしまうんだな」

「なるほど…」

「だからあえて、その才能を閉じようと努めてしまう。

何も感じない。何も影響を受けない。そんなクール
な自分でなくては…。なんてね」

「才能を、閉じる…か。きっとこれ全ての人に起こり
得るよね」

「ああ、その通りだ」

モックまは深く頷いて、言葉を続けた。

「幼い頃、親に叱られた経験があるだろう？」

「うん、そりゃね」

「例えば…。やんちゃすぎる子は粗相があっちゃいけ
ないと、行儀をしつけられる。コロコロ興味の変わる
子は一つに集中しなさいと叱られる。オシャレにばか
り気が向くこは、子どもらしくなさいと怒られる。

けれどこれは全て、制御できない才能の源泉が表に
噴出した結果なんだ」

「うん。今なら分かるよ。きっとやんちゃな子は無鉄
砲なおひつじ座。コロコロ興味が変わるのはふたご
座っぽいな。そしてオシャレに気が向く子は、きっと
てんびん座が強いんだ」

「ああ、そうかもしれない。

子どもの頃は自分の欲求をコントロールできない
だろ。『源の欲求』の月だけが一人働いている状態だ。
大人にはそのエネルギーが時に過剰に映ってしまう。

その結果、心配して彼らをしつけようとするんだな。

そうして子どもが大人になった時、過去の怒られた
経験からそいつを欠点と思ひ込む。

けれどもし、君が本当に自分の夢を見つけたいなら。
この幼少時代に抑え込んだ肚からの欲求を見つけだす
ことなんだ」

でもどうやって、そう問い返そうとした瞬間、「君
ならできるよ」くまは、優しい眼差しでそう言った。

1

2

3

4

5

6

7

ぼくはもうそれ以上何も言えず、自分の学習に戻ったのだった。

くうん…とチョビの鳴く声が聞こえた。

薄く目を開く。

また庭の方で、かすかにチョビが鳴いた。

(ごめんな…心配してるんだな、お前)

目を閉じ、窓の向こう、雨の中に座っているチョビの姿を思い浮かべる。じっと部屋の様子を伺^{うかが}っている、素朴なまろい顔が少しずつ黄みを帯びていき、やがて月ちゃんの姿と重なった。

薄暗がりの中にプカプカ浮かぶまろい月。

おしゃぶりをくわえ微笑んで、こちらを見ている。

隣にはチョビがいて、何故だか二人は親しげだ。手を繋ぎ^{つな}、こちらを見ている。

(ねえ、思いだちて…)

月ちゃんが言った。

くうん…とチョビがまた小さく鳴いた。その鳴き声の意味することが、不思議と分かる。

(ねえ、思いだしてよ…)

妙なことにチョビまでがそんなことを、ぼくに促^{うなが}してくるのだった。

(…お前、何か知ってるの…)

チョビの大きな瞳を見返して、そう尋ねる。

— きゅうん…

そしてまた、チョビの声。

いや、違う。こいつはチョビの声じゃない。チョビだけれどチョビじゃない。もっと小さい赤ん坊だった

頃の…。

風に揺さぶられた木の葉のしずくが物置のトタン屋根に勢いよく落ち、タタンッと激しい音を立てた。

強い眠気^{おそ}に襲^{おそ}われて、次第に意識が遠のいていった。

*

世界が美しい音^{おと}で溢^{あふ}れていた頃がある。

混じりけの無い色彩で、満ちていた頃がある。

あの時はそれが当たり前で、特別に素晴らしいとも貴重なこととも、思っていなかった。

そしてとりわけ心震^{ふる}える出来事が起こる日は、朝目覚めるとそれが分かった。眠りと覚醒のはざまで、風にそよぐ木々や小鳥たちのさえずりが、そっと教えてくれたからだ。

そんな日は、床下のその下の巨大な大地の温もりを、肌で感じる事ができた。深く深く愛しむように、大地はぼく^{からだ}の身体に語りかけた。

(さあ、行っておいで)と。

(お前だけの世界が、始まるよ)と。

大きくなるにつれて、そんな朝を迎えることは少なくなっ^たし、世界には悲しいノイズや怒りを含んだノイズがたくさん存在することも知った。

ピュアな絵の具にちょっぴりずつ灰でも混ぜるように、ぼくの世界は少しずつ色あせていった。

それはぼくの内側に寂しさを生んだけれど…それでも心の深くには明るさがあった。

雑音と美しい音^{おと}、濁^{にご}った色と清らかな色。

異なるものたちが織りなすこの世界は、やっぱりぼ

くをワクワクさせた。その向こうには、誰もまだ知らない新しい世界が広がっている気がしたからだ。

もうずいぶん長いこと「心震える日」は訪れていなかった。

目覚める度、代り映えのしない朝に少しがっかりしたけれど、次第にそんなことすら思わなくなった。

そして（あれは幼い頃の夢^{ゆめまぼろし}）だったのかも…）そう考えて、ほとんど思い出すことすら無くなっていった。そんな、11才の秋。

その朝は唐突^{とうとつ}にやってきた。

目覚めたぼくは、身体を包むエネルギーがほのかな温もりに満ちていることに気がついた。

目を閉じ、微笑む。

今日は一体なにが起こるんだろう…。

そう思うだけで、胸が期待ではちきれそうになった。

半年ほど前から母さんの強い勧め^{すす}めで、ぼくは塾に通い始めていた。数学や理科は苦手だったけれど、ぼくは国語が好きだったから、学校では触れないような文学の奥深さを教えてくれる授業が楽しみだった。

その日の塾は国語の授業だった。

だからぼくは、そこで何か素敵^{すてき}なことが起こるのかな？ そんな風に考えた。

いや、きっと違う。心震える出来事は、誰かが準備した小さな部屋の中で起こるんじゃない。もっと大きな広々とした世界で起こるんだ。そこできっと、もう一人のぼくに会おうんだ。そう思った。

（…もう一人の…ぼく？）

表現があまりに突飛^{とつ}だったので、目を閉じたまま、

ふふっと微笑んだ。

タタン…タタン…。雨がトタン屋根をリズムカルに打っている。ぼんやりと天井を見上げ、夢の続きを思った。

そしてまた、遠い記憶へと降りていく…。

*

草木がその場所だけ、そっと静かに揺れている。

友達^{ともだち}は皆、「別に何も変わらない」そう言って笑ったけれど、ぼくはどうしてもその茂^{しげ}みが気になった。

下校途中の姉ちゃんが「あんた、こんなところで何してるの？」背後からそう呼びかける。

「何かいるんだ…」

と答えると、姉ちゃん^{かたわ}は傍らまで寄って来て肩越^{かたご}しに覗き込んだ。

— きゅうん…

小さな…ほんの小さな誰かの呼吸。茂みの向こう、側溝^{そつこう}の隙間^{すきま}から、かすかに聞こえるその声をぼくは聞き逃さなかった。草木を踏み分けコンクリのはめ込み板に手をかける。

「ちょ…ちょっと、あんた何やってるの？」

それには答えないで力を振り絞り、はめ込み板を持ち上げた。

泥^{どろ}と雑草で埋め尽くされた溝の中に、何かいる。

「こ…小人？」

思わずそうつぶやいた。

薄桃色の肌をした手足のある小さな生き物が、そこに横たわっていたからだ。

驚いて、姉ちゃん^{のぞ}が覗き込む。

「…小人って…。これ、生まれたばっかの仔犬^{こいぬ}じゃん」

1

2

3

4

5

6

7

そう言って、無造作に手を伸ばした。

ぼくはすぐさま「待って！ ぼくがやる！」と叫んで膝をつき、優しくその生き物を抱き上げた。

仔犬はまだ毛も生えておらず目も開いていない。ブルブル震えながらぼくの胸の中でまるまった。

手の中に、命があった。

左手の親指に触れた仔犬の胸の辺りから、わずかな、ほんのわずかな鼓動が伝わってくる。

— トック、トック、トック、トック…

それは命のリズムだった。

今まで感じたことの無い、繊細な、それでいて力強い命のリズム。

ぼくはその日、塾をサボった。

母さんに内緒で仔犬を自室に連れて帰り、夜何度も起きて哺乳瓶でお乳をやった。側溝の中でしばらく独りぼっちだったせいか、仔犬はぼくが離れると、きゅうんと寂しげに鳴いた。

ぼくは出来る限り仔犬の傍にいてやった。

こっそり学校へ連れて行き、授業中は膝の上で温めてやる。休み時間にはクラスメイトに見張りを頼み、お乳をやった。

「母さんにバレるから」そう言われ、姉ちゃんに仔犬を託し塾だけは行ったけど、授業中ぼくはほとんど上の空だった。

そして時々、少しだけ泣いた。

離れていてもあの仔犬の命の脈打つ音が、ぼくには分かった。

自分の心臓と同じように、トクトクと優しく時を刻んでいる。その鼓動が時に、まるでオーケストラのよ

うに教室を包み、ぼくの心を揺さぶった。

ぼくは泣いた。

命あることに感動して、ぼくは泣いた。

そしてその日を境に、学校や塾の授業がまるで頭に入らなくなったんだ。

それどころか唐突に湧き上がってくるものを色にしたくて、ノートを広げペンやクレヨンを重ねたり、言葉をつづったりした。

とりわけぼくを夢中にさせたのは、音だった。

仔犬の鼓動。きゅん…と鳴くその声。お乳に吸いつくときの小さな音…。

そしていつしか、こいつとぼくを包んでいる、世界中に響き渡る「無音の音」とも言うべきものを全身で感じるようになっていった。

＊

タタン…タタン…

雨音が続いている。呼吸が荒くなってぼくは重い身体をやっと起こし、寝返りを打った。

（どうして…こんな大切なことを忘れていたんだろう…）

かすかな意識の中で、そんなことを思う。

一方で、頭の中にもう一つの声。

（思いだしちゃいけなかった。…思いだしちゃいけなかったんだ…）

胸が苦しい。何だか途方もない悲しみが、身体の奥からこみ上げてくる。

（それは、本当でちゅか…）

耳を澄ました。

誰かが心の深くに在る閉じられた扉を、開けようとしている。

まさぐるように、無意識に空をつかんだ。

その手を、ほっそりとした温かな手が優しく包む。

「しょう太…」

母さん…。ベッドの傍^{そば}に母さんがいる。

細く骨ばった、それでもぬくもりのある母さんの手。その手の平からまた、深い悲しみが流れ込んでくる。

ぼくはうっすらと目を開いて「泣かないで…」と小さく言った。

母さんと父さんが離婚したあの日。

ぼくらは何も聞かされていなかったけれど、心のどこかでこうなる事が分かっていたような気がする。

二人の間にはもう埋めることのできない溝^{みぞ}があって、それはきっと、ぼくが生まれる前からジワジワと広がっていたのだろう。

父さんが出て行った晩、母さんはしばらく寝室に閉じこもった。ぼくは何故かずっと涙が出なくて、自室の窓からぼんやり空を眺めていた。

そのときふいに聞こえたんだ。

母さんの、すすり泣く声が。

しっかりと閉じられたはずの寝室から、震えながら泣くかぼそい母さんの声が確かに耳に届いた。

ぼくは両手で顔を覆^{おお}った。

どうして…勉強しなかったんだろう。

母さんにとって、ぼくは最後の希望だったはずなのに。私立の学校に受かったなら、父さんと二人、力を合わせて頑張ろう^{かせ}。稼いでいこう。

そうやって父さんに発破^{はっぱ}をかけて、かすかな絆^{きずな}を必死^{たぐ}で手繰り寄せていたのに。

どうしてぼくは、母さんの願いを叶えてあげられなかったんだろう。

窓を閉めた。

部屋の扉が閉まっているのを確かめて、布団にもぐりこむ。涙^{あふ}が溢れた。嗚咽^{おえつ}が誰にも聞こえないよう、枕に顔を押しつけ、静かに泣いた。

(もう…もう二度と…)

ハッと目を覚ました。

ゆっくりと、ベッドの上に起き上がる。

雨は止み、カーテンの隙間から白っぽい朝の光が差し込んでいた。ベッドの脇に置かれたサイドボードに、麦茶の入ったコップが置かれている。そいつを手に取り一気に飲み干した。

そう…。そうだ。ぼくはあの日、あの瞬間、誓ったんだ。

もう二度と、何かに心奪^{うば}われたりしない。

もう二度と、自分の感覚を信じない。

そんなことをしたらきっとまた、ぼくの大切な人を悲しませるから…。

目を閉じた。

(…それは本当でちゅか)

そう誰かが問うた気がする。

ぼくは微笑んだ。

「本当じゃない。ぼくはぼくの全てを…信頼する」

そうハッキリと言葉にし、立ち上がる。

勢いよくカーテンを引いた。

1

2

3

4

5

6

7

雨に濡れた屋根が幾重にも続き、その家並みの向こうに白く輝く太陽が登ろうとしていた。

＊

目覚めたその日、ぼくは母さんに謝った。

小さなくまのぬいぐるみ。こいつは占星術のお守りみたいなヤツで、ぼくにはとても大切な相棒^{あいぼう}であること。

西洋占星術は人生って旅のお供^{とも}で、時々開いて見る大きな地図のようなものだってこと。

そいつを軽く扱われた気がして、ついひどいことを言ってしまったこと。

本当は、父さんも母さんも大好きでどちらも大切な存在であること。

母さんは微笑んで「そうなのね…」と言った。

「あんたが休んでる間、すごい可愛い子がお見舞いに来てたよ」と姉ちゃんが言った。

「え、誰？ 木野さん？」

驚いてそう聞き返すと、「ええ。確か、そんなお名前だった」母さんが答える。

「なんか言ってた？」

「うん…。占星術のこと、お母さん聞いたのよ。ひょっとして一緒にやってるの、この子かしらと思って」

「そしたら何て？」

「お前、この数日でずいぶん変わったって。占星術を教えてもらうようになってから、頼もしくて優しく、素敵なお友達だって、そう感じるようになったって」

自然に顔がほころんでしまう。

「ひゅーっ！ やりますなあ、しょう太先生」

姉ちゃんが口をはさんだ。

「うるさいなっ」と肩を小突くと、「また占星術、教えてねって言ってたよ」そう姉ちゃんが目を細めた。

37. 三沢先生との再会

「おい」

ぼくはモックまの鼻先を軽くつついた。

まるでデディベアのように両手両足を広げ机の上に乗っている。妙なことにヤツと来たら、あれ以来うんともすんとも返事をしない。

「お前…怒ってんだろ？ ゴミ袋に詰め込まれて」

ビーズのような小さな目は、じっと静止し前方を見つめている。

「悪かったよ。そうすねんなんて。また栗の菓子、持ってきてやるからさ」

そう話しかけても小さいくまは、しゃべろうとしなかった。

「お前にさ。90度のアスペクトについて訊きたいことがあるんだ」と、一人語りかける。

「最後の文型。

□□と □□を組み合わせ、□□なる。

こいつの使い方が、まだ分かんないんだよなあ…」

くまのタブレットを取り出し三沢先生のチャートを開く。そいつを見るとまだ心がチクリと痛んだけれど、ぼくはその痛みと向き合うように、しし座の月とさそり座の冥王星、その90度のアスペクトをじっと見つめた。

「一体こいつをどう使ったらいいんだろう…」

きゅんっ！と庭先から声が聞こえた。

窓を開け、軒下^{のき}を覗く^{のぞ}。

そこには嬉しそうにこちらを見上げる、ヨビの姿があった。

「心配かけたな、チョビ」

声をかけ、部屋の中に振り返る。

「少し散歩に行ってくるからさ。帰ったら機嫌なoshiteレッスンしてくれよ。な、モックま！」

洋服に着替え玄関に向かう途中、母さんが台所から顔を出した。

「しょう太、出かけるの？」

「うん。一週間もチョビを放ったらかしだったから。散歩に行ってくる！」

「お母さん、この後仕事に出るけど、病み上がりなんだから早めに帰ってくるのよ」

「うん。そうする」

返事をし、庭に出る。

チョビは犬小屋の前で行ったり来たり、大はしゃぎだ。カチンと前足に何か当たり、ぼくの足元に転がる。

拾い上げるとそれは、いつか廊下で三沢先生が落としたスペインのコインだった。

「すっかり忘れてたなあ」

光沢の失われたコインをシャツの袖で磨いてみる。そいつをポケットにしまいながら、ふと（学校に行ってみようか…）と思った。

今日は土曜日で学校は休みだ。プールに続く裏庭でチョビを遊ばせてやろう。

そう思った。

最もぼくには、もう一つ思惑があった。

「チョビ。今日はあんまり走れないからさ。学校に行こう。手綱なしで、いっぱい遊んだらいい」

そう言って頭を撫でてやる。チョビは喜んで、まるで先導するように学校へと歩き出した。

＊

学校の裏庭は桜の木の葉が青々と茂り、気持ちのいい風が吹いていた。ぼくが臥せている間に5月に入り日差しはいつしか初夏のようだ。

チョビのリードを外してやる。

「グラウンドまで出ちゃいけないよ」

そう言い聞かせると、チョビはわんつと威勢よく返事をして桜の木の向こうへ駆けていった。

ふうっと一呼吸し、古いベンチに腰を下ろす。

途中、美術室の窓を覗いたけれど人気は無かった。ポケットに手を突っ込み、コインをもてあそぶ。

（そりゃそうだよな…）

そう心の中でつぶやいたとき、チョビが何かをくわえ戻ってきた。

足元にそいつを吐き出す。いぶかしく思いながら拾い上げるとそれはパンの欠片だった。

「お前…これどうしたの？」

チョビはしっぽを振ってこちらを見上げている。

（誰かのご飯を、かつさらっちゃったのかな？）

不安に思って桜の木の向こうに目をやると、誰かがこちらに向かってくる。

「すみません、うちの犬が粗相しちゃったみたいで」

言いながら人影に近づこうとして、ぼくはドキリとした。それは三沢先生だった。

「なんだ、岡田の犬か」

先生はあまり驚いた様子もなく、ぼくらの傍までやってくると、チョビの顔を両手で挟み「このいたずらもんが！」と怖い顔を作って見せた。

チョビは一向に恐れる様子もなく、丸い目で先生を

1

2

3

4

5

6

7

見上げている。

「あの…食事中だったんですか」

「いや、あっちでツツジを描いていてな。久しぶりにしっかり描きたくなくてこいつを使っていたら…」

先生は「二割引き」とシールが貼^はられた食パンの袋を、ぼくの方にちらりと見せた。

そう言えば聞いたことがある。木炭デッサンは消しゴム代わりに食パンを使う事があるって。

「そうだったんですね。お邪魔してすみません」

言いながら、チョビの首輪^{くびわ}にリードをつける。

「なんだ、もう行くのか」

「はい、あの、散歩はどこでもできますから」

そう言って、来た道を戻ろうとした。

「体調はもういいのか？」

先生は、半ば呼び止めるようにそう言った。

「はい。あの雨の日に道端で転んで、しばらく気を失っていて…。発熱がひどくて。でももう大丈夫です」

あの雨の日に、と口に出した瞬間ぼくの心臓はトクトクと波打った。

そこまで口に出したのなら、あの日のことを謝ってしまいたい、そう思った。

「そうか。そりゃ大変だったな」

ぼくは何と返してよいか分からず、かといってそのまま立ち去る気にもなれなくて、少しの間その場に立ち尽くした。

「あの…」

そう続けようとした瞬間、「お前に、話しておきたいことがあってな」低い声で三沢先生が言った。

＊

野球部の連中のかけ声がここまで聞こえてくる。

時折、球を打つ金属^{きんぞく}バットの高い音が生徒たちの声を突き抜けて、ぼくらの耳に届いた。

話があると言いながら、三沢先生は何も言わない。古いベンチに腰を下ろし、チョビがかっさらった食パンの半切れをちぎって、足元の小鳥たちにやっている。

その横顔は思いのほか穏やかに見えた。

「お前が休んでいる間にな…」

先生が、ぼそりと言った。

「実はオレも休みをもらって、青森の実家に帰っていたんだ。どうしても、確かめたいことがあってな」

先生はそう言ってまた、パンをちぎって大地に放った。

隣に座っているぼくの顔はこの人の視界^{しかい}に入っていない。それなのに、先生が何か言う度ぼくは深く頷いた。

どんな言葉も聞き漏^もらしたくない。そう感じていた。

＊

「オレの家は青森の田舎で金属のスクラップ工場を営んでいてな。親父は早くに亡くなって、三沢の家に嫁いとお袋と、爺^{じい}さん、婆^{ばあ}さん三人で切り盛りしていたんだ。

親父が生きていた頃はそれでも実入りが良かったようだが、とにかく男手の居る仕事なのに、爺^{じい}さん一人で仕切っていたからな。家計は火の車だった。

おまけに爺^{じい}さんは、事あるごとに日雇いをケチるもんだから、お袋は子守と鉄くずの仕分けで朝から晩まで働いていた。

スクラップ工場^{えいり}ってのは、鋭利な鉄くずをより分けたり高温のバーナーで切断したり、そりゃあ危険な仕

事なんだ。

物心つく頃にやどうにもお袋が可哀想でな。

10才を過ぎた時、オレは爺さんたちに言われるまま、お袋の手伝いをするようになった。

爺さんは、そりゃあ厳しくてな。オレが道具の手入れを忘れたりするとこん棒で思い切り叩いた。

背中や腕なんぞ叩けば仕事に触りがあるかもしれない。だから大抵は、けつを思いっきりぶっ叩かれた。そりゃもう、火が出るほど痛くてな。よく泣きながら家に帰ったもんだ。

ある時オレは、先の尖った鉄くずを気付かず踏んづけちまった。

足の裏にひどいケガをしたが、そいつを誰にも言えなかった。爺さんにバレたらまたケツを嫌ってほど叩かれる。それくらいなら布切れで縛って止血して、自分で何とかしようと思ったんだ。

翌朝足は腫れ上がり、靴を履くのもやっとだった。それでもオレは平気なふりをして学校に通い、帰れば黙って工場で働いた。腫れは引かず痛みは増す一方で、ついにある朝、高熱を出して起き上がれなくなった。

病院に運ばれた時にはもう手遅れでな。

菌が膝まで回り、切断しなきゃ命が無いと言われたんだ」

先生は手に残った最後のパンの切れ端を足元に放った。勇敢なスズメが一羽、足元まで寄ってきて、そのパンくずをついばむ。

ぼくはそいつを見守りながら、じっと先生の話に耳を傾けた。

「病院から帰ってきたオレに、爺さんは何も言わなかった。いたわりの言葉も慰めの言葉も一言も発することなく、まるで使えなくなったバーナーでも見るよ

うに、チラリと目をやっただけ。

以来、オレには一切構わなくなった。

17才の頃だったろうか。オレはある時爺さんを、猛烈に憎んでいることに気が付いた。

人をまるで道具のように扱って、故障したと思ったら目もくれなくなる。10才の子どもが、ケガしたことを言い出せないほど日常的にせっかんをする。

そんな爺さんのことを、心の底から憎いと思っていることに気がついたんだ。

それまでオレは、全ては自分が招いたことだと思っていた。この脚のことも。爺さん、婆さんからまるで、厄介者のように扱われることも。

けれど、違うとその時オレは思った。

全ては爺さんのせいなんだ。そう思った。

なあ、岡田。時折人は他人を責めず、自分を責めることを美德とする。

だがオレは思うんだ。この二つに大差など無いってな。

自分を責める矛先が、他人に向く。他人に向いた矛先が、ふとした瞬間自分に向く。この繰り返しをしている限りオレたちは『責め』という感情に囚われ続ける。

けれどその時のオレは、爺さんを憎むことで自分の痛みが和らぐような、そんな錯覚をした」

先生はそこまで話すと、ゆっくり体をぼくの方に向け、「その憎しみが、ずっと続いていたんだ。この年になるまで、ずっとな」そう言った。

ぼくは目を見開いて、先生の瞳を見返した。

「驚いたか」

涼しい顔をして、そう尋ねる。

ぼくは何と言って良いか分からない。伏し目がちになり言葉を探す。

1

2

3

4

5

6

7

「…憎しみや怒り。嫉妬や妬み。オレはそうした感情を、別段悪いとは思わない。

ネガティブな感情が0になる。そんなことが果たして人間に起こり得るだろうか。

だからオレは爺さんへの憎しみに、罪の意識など無かった。誰にわざわざ自分の醜さを白状して、懺悔する必要があるだろう。そう思っていた」

足元のパンくずは喰い尽くされ、気づけば小鳥たちの姿は消えていた。

ベンチの横でうずくまっていたチョビが、そっとぼくの足元に寄り添う。チョビの背中を撫でながら、ふと不思議に思って先生に問うた。

「じゃあ…どうしてぼくにそんな話を、するんですか」

先生は小さく笑った。

「もう…終わったからだ」

「え…」

「人間が、ネガティブな感情を全て手放すことなど有り得ない。でももし、もしも…。

そうした感情が仮にたった一つでも、跡形もなく消えたなら。ただ穏やかな心を、取り戻すことが出来たら。それほど幸せな事が、あるだろうか」

先生はそう言って、優しい眼差しをぼくに向けた。

*

「あの日お前に、オレの家庭を示す場所に在る、冥王星の話を開かされて…。すぐにオレは爺さんの姿を思い浮かべた。

個人の欲求を無視し、たましいの成長のためだけに働く星。時には人の、肉体すら破壊する星。

オレにとって爺さんは、家という安心なはずの場所

に居座った、冥王星そのものだった。

だがオレは、お前からその話を聞かされた時、強い怒りに囚われた。

『たましいの成長のため』そのフレーズが、どうしても受け入れられなかった。

10才の子どもが片足を失うことで得られる、たましいの成長。それほど過酷な思いをしてまで必要な、たましいの成長など有り得るだろうか。

いや絶対にない。爺さんは悪であり、オレの成長を促す存在であるはずがない。在ってはならない。そう大声で叫び出したかった。

お前を傷つけてしまうことを恐れて、オレは教室を出た」

先生はその足で青森へ向かい、実家へ戻ったと言う。すでにお爺さんもお婆さんも亡くなり、年老いたお母さんが一人暮らす、青森の故郷に。

「実家に戻ったオレは、紅蓮の炎のように燃え続けている爺さんへの怒りを見つめ続けた。

赦せない…。憎んでも憎み切れない。

そんな感情がとめどもなく溢れてきた。

だがオレは何もこの感情に浸りたくて、わざわざ青森まで帰ったんじゃない。

オレには一つ目的があった。

それは爺さんが長年に渡って書き溜めた、日記を読むことだった。

お前が言った通り、もしあの事故がたましいの成長のためだと言うなら。その証が爺さんの日記の中に在っても不思議は無い。

爺さんは、そりゃあ一つのことをコツコツやり続ける性分だな。お前の言葉を借りりゃ恐らく不動宮が強かったんだろうさ。

若い時分から一日も欠かさず日記を書いて、そいつを全て残していた。

オレはじいさんが死んだ時も涙一つこぼさなかったし、残した日記にも全く興味を示さなかった。

けれどもし、ここにオレの感情を溶かす^と何か書かれているのなら。それによって、たましいの成長とやらに与^{あず}かれるのなら、一つ読んでやろう。そう思ったんだ。

^{するど}鋭いお前なら分かるだろうが、オレは何もそいつを期待して行ったんじゃない。

じいさんは悪だった。あの事件がもたらす成長など、欠片もなかった。

実のところその証を見つけて、ほら見ろと言ってやりたかったんだ。

お前にじゃないぜ？正直、誰に対してかよく分からない。西洋占星術ってもんに対してか、こんな運命をオレに与えた天に対してだったのか…」

先生は足元に目を落とし、しばらくの間、口を閉ざした。

ぼくはもう高ぶる気持ちを抑えることができない。万に一つの期待を込めて、こう尋ねた。

「そこに、書いてあったんですか？先生への想いとか。お爺^{じい}さんなりの、何と言うか…」

「愛情」と言う言葉を口にしようとして、ぼくはそいつを呑み込んだ。壮絶^{そうぜつ}な先生の人生を前に、その言葉がどうしてもなく白々しいものに思えたからだ。

「愛を、感じたかと聞きたいのか？」

先生は、静かに言った。

ぼくはほとんど無意識に、ぐっと先生に向き直った。

どうかその日記に先生への愛情がほんの少しでも書かれていたら…。そう強く願った。

先生は、ふっと小さく笑って、首を振った。

「無かった。じいさんの日記には、そもそも他人に対する感情の表記と言うものが、ほとんど無かった。

ただ、その日あった出来事が淡々と書かれていた」

「先生が事故にあった日も？」

「ああ。そこにはただこう書かれていた。陽一^{えし}、壊死のため左脚切断。とな」

小さな絶望が、ぼくを包んだ。

涙が溢れる。くうんと、チョビが心配そうにぼくのふくらはぎに頭を押し付けた。

「泣くな、岡田。もう終わったことだと言っただろ？」

先生が、優しく言った。

けれどその日記に、この人への愛情が一遍^{いっぺん}も記されていないなら、一体どうしてこいつを終わらせることが出来るだろう。ぼくはさすがのような想いで先生を見返した。

「オレへの愛情は書かれていなかったが…。そこにはある人への熱烈な思慕^{しぼ}が書かれていた」

先生はそう言葉を続けた。

「そこには、くり返しくり返し夢に見る自分の父親のことが書かれていた。

飲んだくれの父親。オレにとってはひい^{じい}爺さんに当たるその親父が、酒に酔っぱらって手を挙げる。

その一つ一つの出来事が克明^{こくめい}に記されていた。

分かるか？岡田。

じい爺さんが亡くなったのは72才。

その年まで、30代の頃から続く全ての日記に自分の親父との関わりが、コンスタントに出てくるんだ。その晩に見た夢^{よみがえ}、蘇る記憶^{だんべん}の断片としてな。

オレは読み進めていくうちに、あることに気が付いた。

それはな、岡田。この人は、殴^{なぐ}ることではか人と繋^{つな}がる術を知らなかったということだ。

無条件に愛してくれるはずの父親と、叩^{たた}かれることでしか、繋がりを持てなかったということだ。

オレはそれに気がついたとき号泣^{ごうきゅう}した。爺^{じい}さんが、哀れだと思った。

でも一方で、だから何だ！と叫んでいた。

成長^{かてい}する過程の中で、どうしてそのいびつな愛を手放さなかった。自分が受けて苦しんだのなら何故そのいびつな愛の表現を、何としてでも改めなかったんだ！！

それが…大人になるってことじゃないのか…。

…

…

三日三晩、オレはのたうち回って苦しんだ。

内側に湧き上がってくる感情を、どう扱って良いのか分からなかった。

爺^{じい}さんを哀れに思う気持ちと、それにも増して憎らしいと思う気持ちの間で葛藤^{かつとう}した。

そして最後の晩、オレはあることに気がついたんだ」

先生はまた、言葉を切った。

木漏れ日が、ぼくら二人の膝の上で静かに揺れていた。

＊

「爺^{じい}さんは…」

先生は、かすれた声で話し続けた。

「確かに暴力の痛みを、減らしてオレに回していた」

言葉の意味が分からなくて先生の瞳をじっと見返す。

「少なくともじいさんは、何の理由も無くこのオレをぶ

つことは無かった」

ぼくは驚いて「でも…」と言葉を返そうとした。

先生はそれを目で制^{せい}し、

「いいから、聞け。お前の言いたいことは分かる。

どんな理由があっても、子どもに手を挙げること、もので体を痛めつけることはあってはならない。

肉体は存在の証だ。その身体^{からだ}を痛めつけられると言うことは、人は本能的^{ほんのう}に存在^{ひてい}を否定されたと思い込む。頭じゃなく、理屈じゃなく、身体^{からだ}の奥にそう刻まれてしまうんだ。

だから爺^{じい}さんのやったことは、決して赦^{ゆる}されることじゃ無い。だけど…。

オレは気がついたんだ。

爺^{じい}さんは爺^{じい}さんなりの理屈で、何の理由もなく子を殴^{なぐ}ることはよそう、そう心に決めていた。

自分の父親のように、酒を飲み稼^{かせ}ぎもなく、家族を路頭^{ろとう}に迷わす真似だけは絶対にしない。

オレは何としてでも働き続けて身内を守る。

そんな爺^{じい}さんなりの信念が、あったはずなんだ。

もっと言うならば…。

爺^{じい}さんを殴^{なぐ}って育てたひい爺^{じい}さんも、恐らく激しいせつかんを受けてきたはずなんだ。そしてひい爺^{じい}さんなりの理屈でもって、その暴力の痛みを減らして次の世代に回した。

だからこそオレはお前らを育てる中で、決して何かを無理強いすることは無い。暴力やせつかんで、子どもを支配することは無い。

それは爺^{じい}さんを初め、そのまた上のひい爺^{じい}さん、そのまた上のひいひい爺^{じい}さん、ひいひい婆^{ばあ}さんが、命^{いのち}がけで繋^{つな}いだリレーの結果なんだ。

可笑しいだろ？傍^{はた}から見ちゃクレイジーさ。オレも

頭じゃそう思った。

自分の脚を奪った張本人…少なくともそう信じてきた相手に、こんな感情が湧くんだからな…」

ぼくはか細い声で、やっと言った。

「…こんな…感情…」

先生が、頷く。

「ああ。オレは生まれて初めて…。

生まれて初めて爺さんに、心の底から感謝した」

両の目は涙で曇り、先生の表情は分からなかった。

けれどぼくは知っていた。

この人の瞳はもう、悲しみのベールをまとっていないことを。無気力で、無感動で、情性的な、あの濁ったベールはもう、とうに脱ぎ去っていることを。

先生はカバンからノートを取り出し、開いて見せた。そこには 90 度のアスペクトの文型が、朴訥な文章とともに記されていた。

9. [冥王星の破壊力] が [月の肉体] に、歯止めをかける。

子ども時代、オレの肉体は冥王星の破壊の力によって歯止めをかけられ
その一部を切り取られた。それによってオレは、愛という感情を見失った。

10. [冥王星の洞察力] と、[月の感情] を組み合わせ [] する。

さそり座の冥王星の強力な洞察力と、しし座の月の感情と情熱。オレはこの
二つを組み合わせ、たましいのリレーが教えてくれる、愛の本質にたどり
ついた。4ハウスという「自分の故郷」に戻り、極端なまでに深く深く内面を
見つめて。

オレはこれからもこの二つを組み合わせ、愛の神ずいを見いだしていこう。

1

2

3

4

5

6

7

グランドは昼間のにぎわいが消え、クラブの連中も
帰り支度を始めていた。

チョビのリードを引きながら、ぼくは先生と二人、
校庭の片隅^{かたすみ}を歩いた。

「病み上がりだったのに、すっかり話し込んでしまって
…」

申し訳なさそうに先生が言った。

「いえ…。返って元気になりました」

笑ってそう答える。

いつしか日は傾き、ほっそりとした月が夕闇の中に
浮かんでいた。ぼくらは校庭の脇を歩きながら、門へ
と向かった。

先生が言った。

「オレはもう一度、スペインへ行こうと思う」

驚いて、その横顔に目をやる。

視線をくすぐったように避けながら、三沢先生は言
葉を続けた。

「実はな。少し前、スペインの、ある作家の工房で働
く男に声をかけられた。大学で後輩だった男だ。

その作家がタイルと絵画を組み合わせた、大規模な
壁画を作ろうとしていてな。テーマは『青』。

日本人の東北出身の、色彩感覚が豊かな画家を探し
ている。三沢さんどうですかって」

「どうしてそんなすごい話を、迷っていたんですか」

目を見開いて、そう尋ねる。

三沢先生はふふっと小さく笑い、首を振った。

「すごくなんかないさ。その仕事はほとんどボラン
ティアだ。飯と寝る場所は用意されるが後はぼただ
働き。それに作品が仕上がれば、どうなるか分からな
い。大抵はそれでお払い箱だろう。

安定した仕事を捨てて、飛び込むほどのチャンス

じゃない。オレはそう思った」

先生は言葉を切り、自分の義足を労わるように大き
な左手で優しく撫^なでた。

「今思えば、オレは怖^{こわ}かったんだ。

作品は心の鏡だ。肚^{はら}の中にある異常なまでの憎しみ
が、世界の人々の前に晒^{さら}される。

オレはそいつが怖^{こわ}かった。罪悪感などないと言いな
がら、こんな醜^{みにく}いものを表現しちゃいけない、世界に届
けるなんぞ笑わせる、そう無意識に、自分に歯止めを
かけていたんだな…」

開かれた門の前で、ぼくらは立ち止まった。

握っていた例のコインをポケットから取り出す。

「じゃあこれは、旅^{ぐん}の軍資金^{しきん}ですね」

そう言って先生の前に差し出した。

手の平の中で鈍く光るコインに、二人、無言で目を
落とす。やがて先生はそいつをぐっと握ると、正面か
らぼくを見据^{みすえ}えて「ありがとう」と言った。

ふと、何かが気になったのだろう、ぼくの瞳を覗き
込む。

「お前は…何かやりたいことが決まったのか？」

ぼくは微笑み、首を振った。

「まだ分かりません。でも…」

先生がじっと見返す。

「絵を、描いてみようと思います。そして…たくさん
の詩を読みたいなって…」

先生は、しばらく黙ってこちらを見つめていたけれ
ど、「そうか。そいつは良いな」穏やかにそう答えて、
それきり何も言わなかった。

38. 別れ

「サインの火・地・風・水は、エレメントと言うんだが…。

実はその上にもう一つ、5番目のエレメントが存在すると言われている」

「5番目のエレメント…？」

ぼくは髪をとかしながら問い返した。

学校の支度に忙しく、耳だけはモックまのレッスンに傾けていた、いつかの朝のことだ。

「ああ、そうだ。火・地・風・水を全て統合した5番目のエレメント。とは言えチャート上に記されているわけじゃない。一種架空^{かくう}の存在だ」

「それって12サインの成長ストーリーを終えた、最終段階ってこと？」

そう尋ねる。

「うむ。10の天体を使い切り、異なる質の仲間たちと切磋琢磨^{せつさたくま}する。そのくり返しの果てに辿^{たど}り着く新境地と言ったところかな」

「んー…意味は分かるけどさあ。ぶっちゃけ水の強いぼくからすると、地はリアリスト過ぎて面白みが無いし、風はつかず離れずで冷たい感じだし。火は理想論を譲^{ゆず}らなさそうで面倒くさいし。

神じゃないんだから。実際は無理でしょ」

ぼくはそう言葉を返した。

「ああ、そう感じるならそれでもいいさ。

けれど君は風の強い女の子に恋をして、火と地に多くの天体を持つ友に出会った。

人は愛する相手を理解したいと願うものだ。

自分の水の強さが全面に表れて、友達をコントロールしてしまう。相手のドライな態度に苦しみ悩む。

きっとこの先、そんな経験が待っているはずだ」

「え…もしそうになったら一体どうすりゃいいのさ」

「もう既に、君はそいつを充分学んだろ？」

言われてぼくは肩をすばめ、制服の袖^{そで}に腕を通した。

「大切なのは、相手の願いに耳を澄ますこと」

めずらしくモックまが言葉を続ける。

「相手の願い…？」

「ああ。水はああだこうだ口をはさんで、親しい人を思い通りにしようとする。

けれどその心の奥には相手がより『安らか』で、幸せであって欲しいと言う願いがある」

「ああ、分かる」

「同様に、火の強い者は自分や人の『尊厳^{そんげん}』を守ろうとする。それがいき過ぎて、時に無用に孤独^{こどく}を選んでしまう。

風の強い者は『自由』を愛する。他人の自由。自分の自由^{ゆえ}。故に、時に責任を避けようとする。

地の強い者は『自立』を願う。経済的な自立。物質的な自立。社会に貢献すると言う精神の自立。

そして時に、その固定概念^{こていがいねん}にしばられる…」

火・地・風・水の根底にある願い。

『安らぎ』と『尊厳』。『自由』と『自立』。ぼくはその言葉を心の中で反すうした。

「その先に、一体何があると思う？」

小さなくまは、そう尋ねた。

「んー…。分からない」

と答えるぼく。

「そうだな。これは宿題だ。ぼくが帰るその日までに、どうか答えを見つけてくれ」

＊

いつもの空き地を超えて、T字路に差しかかる。

1

2

3

4

5

6

7

その後を必死でついてくるチョビ。ぼくはまるで空でも駆けるように、自宅へと向かった。

モックま。ぼくは分かったんだ、あの答えが。

安らぎと尊厳。自由と自立。

その向こうにある5番目のエレメントの示すものが。

お前はいつか、夢見るような目つきでこう言った。

占星術のチャートには宇宙の願いが詰まっている。人間の成長への願いが、狂おしいほどにつまんでいるってね。

ねえくま。ぼくは分かったんだ。

...

...

成長とは、愛を知ること。

月、水星、金星。こいつらを使うことは、何も成さない自分を愛すること。

そして太陽を使うことは、自分なりの愛の表現を、知ることなんだ。

火星を使うということは、その愛の表現を、誰かに届ける勇気を持つこと。

木星を使うということは、互いの表現した愛を、その豊かさを、分かち合うゆとりを手にする事。

土星を使うということは、自分も皆も全ての人が、愛を自由に表現し、受け取れる社会を築くこと。

そしてトランスサタニアンを使うことは、どれほどの痛みも、過酷な出来事も、全ては宇宙が与えてくれた、無償の愛と知ることなんだ。

5番目のエレメント。そいつが大切にすることは、愛だ。

水の安らぎを願う心、尊厳を重んじる火の精神。風が大事にする知性という自由。土が大切に自立。

その向こうに変わらず輝いているものは、愛だ！！

靴を脱ぎ捨て駆け上がり、自室の扉を勢いよく開ける。

「モックま！」

そう大きな声で叫んだけど、部屋の中は静まり返っていた。

ぼくはまだアイツが知らん顔を決め込んでいると思って、勉強机に駆け寄った。

けれどそこに、モックまの姿は無かった。灰皿に似た例の空飛ぶ乗り物も、跡形もなく消えていた。

ふっと頬に当たる冷たい風。

閉めたはずの窓がわずかに開き、カーテンが揺れている。窓の棧に残された、ノート of 切れ端が目に残った。

手を伸ばす。

そいつはモックまが残した、ぼくらへの手紙だった。

内容は、きっと君たちの想像通り。

ぼくへの信頼。成長の祝福。出会えたことへの感謝が、アイツらしいクールな文面でつぶられていた。

そしてヤツはきっとぼくらに託したんだな。

ここで学んだ星の使い方を、どうか世界中に届けて欲しいと。まだこいつを知らない子ども達に。たましいの奥深くで必要としている大人たちに。きっと届けて欲しいと。

モックまは、最後に一つ地球のみんなに詩を残した。そいつを書き記して、この物語をお終いにしようと思う。

けれど君たちは知っているはずだ。

本当の物語は、今ここからスタートすることを。

君の人生というフィールドで。

宇宙がぼくらに与えてくれた、たった一つのかげが
えのないフィールドで。

*

自分の星を使ってごらん

世界に色彩が生まれるから

そのまま星を使い続けて

そしたら君だけの夢に出会えよ

そのまま星を使ってごらん

そしたらきっと夢が叶うさ

そしてときどき星を読まず

ただ冒険してごらん

星も、人も、動物たちも、木も花も

アクシデントもラッキーも

すべてが君を、君の夢を応援している

そんな愛に気づくだろう

1

2

3

4

5

6

7

～あとがき～

ここに描かれた登場人物たちの日々は、星を使って生きる人々が人生を通し経験するような、小さな奇跡であふれています。これは一つの人生をぎゅっと凝縮した物語であり、本書を読んだ翌日に「かわり映えのしない一日だった」と感じて、どうかはっきりしないでくださいね（笑）。

星は使えば必ず、あなたに深い気づきを与えてくれます。

何故なら、月も太陽も土星も、あなた自身の内なるエネルギーだから。才能の源泉だからです。

それは明日かも知れないし、一ヶ月後かも知れないし、3年後かも知れません。その成長のプロセスを、どうか存分に味わい楽しんでください。

さて、わたしはこの物語をつづる中で、忘れかけていた昔の記憶を思い出しました。

7才の頃から20代前半まで抱いていた一つの夢。それは、児童文学作家になることでした。占星術家になるずっと以前、とうに諦めたはずの夢を気づくともう一度追っていた。

そして物語を書き進めるうちに、夢中で文章を書いていた当時のワクワク感が蘇^{よみがえ}ってきました。

疲れてうたた寝をすると、星々がわたしの夢の中で囁^{ささや}きました。

「このエピソードも入れておくれ」「どうか、ぼくらのこの願いもつづっておくれ」…。

このポエティックな創作の時間は、大変に幸せな至^{しあ}福^{ふく}のひと時となりました。

そして42才の今、かつて諦めたはずの大きな夢が、一つ叶ったのです。

星を使うこと、夢を叶えることに年齢制限はありません。ただあなたの内側にくすぶっている、10人のスペシャリストを信頼し、行動すること。それだけなのです。

皆さんのこの先の未来が、豊かな学びと色鮮やかな喜びで溢れることを、信じています。

さて最後に、本書の出版にあたり応援して下さった方々へ、お礼を述べさせていただきます。

壁にぶつかりへこたれそうになる度、目からウロコのアイデアを次々提案^{きゆうち}し、窮地を救ってくださった、友人で、コンサルタントのきずきさとるさん。

素晴らしいご縁を繋ぎ、心身に染みわたる優しいお料理で力づけてくださった、野菜の料理家・浅田藍^{あい}はさん。技術を惜しみなく提供し、ホロスコープサイトの制作に尽力くださった、エンジニアで占星術家のオガティさん。細やかにデザイン・編集サポートをしてくださった、UMAKIさん。

添^{てん}削^{さく}チームのみんな、あたたかな応援をくださった全ての皆さまに、心より感謝を申し上げます。

本当に、ありがとうございました。

木星（もくせい） 2018年3月



1 占星術 あらまし

ネータルチャート/
トランシットチャート/
天体/
サイン/
ハウス/
実践の大切さ/
まとめ/
チャートを読む/
黄道12宮/
占星術の視点/

2 サイン

キャラクターその成り立ち/
奇数・偶数/
時期/
火地風水/
まとめ - 1/
成長のエネルギー/
まとめ - 2/
12サイン早見表/

3 天体

スペシャリストその成り立ち/
天体の成長期/
天体の成長レベル/
個人の顔と社会の顔/
天体早見表/
月/
水星/
金星/

太陽/
火星/
ルーラー / P.P.
社会天体とトランスサタニアン/

4 活用法

天体を使う - 1/
天体を使う - 2/
天体を使う - 3/

5 チャート

月から火星を読む - 1/
月から火星を読む - 2/
しょう太/
木野さん/
三沢先生/
サインとの比較/
アセンダントを読む/
MCを読む/
アセンダント×天体/
MC×天体/
月と太陽の基本文/
複合的に読む / P.P.

6 ハウス

ハウス/
アセンダントとMC/
ハウスの原点はサイン/
12ハウス早見表/
チャートを読む(文型1・2)/
チャートを読む(文型3・4)/

7 アスペクト

天体同士の角度/
基となる図形/
サインとの関係性/
天体のパワーバランス/
オーブ/
アスペクトの読み方/
合/
合を読む/P.P.
オポジション/
御ポジションを読む /P.P.
セクスタイル/
セクスタイルを読む / P.P.
複合アスペクト/
トライン/
トラインを読む /P.P.P.
スクエア/
スクエアを読む /P.P.P.

木星（もくせい）

占星術家・セラピスト。

西洋占星術をベースにした独自のセラピーを不定期で開催し、北海道、神奈川、名古屋、大阪、和歌山など、全国からクライアントが集まる。

2016年には12星座の背景にあるギリシャ神話を分析し、まったく新しい次世代の占星術を発掘。現在もその研究を続けている。

星の情報を発信するTwitter「モックまくんの星のダイアリー」は定期更新。

水墨画家でもある。全日本水墨画秀作展準大賞二連覇、雪舟美術協会展準大賞など受賞多数。

参考文献

『完全マスター西洋占星術(1)(2)』
著者 / 編集: 松村潔 説話社
『アスペクト解釈大事典』
著者 / 編集: 松村潔 説話社
『占星学 新版』
著 / 原著: リズ グリーン
翻訳: 岡本翔子 鏡リュウジ 青土社
『サターン 土星の心理占星学』
著 / 原著: リズ グリー
翻訳: 鏡リュウジ 青土社
『魂 (プシュケー) の西洋占星術』
著: 鏡リュウジ 学習研究社

『詳解 月の正統西洋占星術』
著: 神谷充彦 学研パブリッシング
『心理占星術コンサルテーションの世界』
著 / 原著: ノエル・ティル
翻訳: 石塚隆一 イースト・プレス
『スピリチュアル占星術—魂に秘められた運命の傾向と対策』
著 / 原著: ジャン・スピラー 著: カレン・マッコイ
翻訳: 東川 恭子 徳間書店
『星空の神々 全天 88 星座の神話・伝承』
著: 長島晶裕 / ORG 新紀元文庫
『NVC 人と人との関係にいのちを吹き込む法』
著: マーシャル・B・ローゼンバーグ
監修: 安納献 翻訳: 小川敏子 日本経済新聞出版社

モックまくんの星のレッスン

2018年4月20日 初版発行

著者 木星（もくせい）

発行人 木全哲也（きまたてつや）

発行所 株式会社 三恵社

名古屋市北区中丸町 2-24-1 TEL (052)915-5211

印刷所 株式会社 三恵社

製本 株式会社 三恵社

©Mokusei, 2018 printed in Japan

定価はカバーに表してあります。落丁、乱丁はお取替え致します。